

SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス No.142・143

1996.8.25

＝巻頭言＝

カリキュラム改革の現状と課題

■第168回大学共同セミナー

電子メディアと21世紀の
ライフスタイル

■第11回大学教員研修プログラム

カリキュラム改革で
大学の中身を変えるには

■FD通信④

慶応義塾大学SFCのカリキュラム改革
と事務局の役割

■第169回大学共同セミナー

文学の方法—漱石を仲立ちとして—

■平成7年度教育プログラム白書・業務白書

■業務通信



Plain living and high thinking

財団法人 大学セミナー・ハウス
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.

カリキュラム改革の現状と課題

文部省高等教育局大学改革推進室長 村田直樹

平成3年2月の大学審議会の答申「大学教育の改善について」では、その具体的な方策として大学設置基準の大綱化、大学評価のシステムづくり、財政措置の3本柱が掲げられました。そして同年7月の大学設置基準の改正では、教養と専門の調和をめざす教育課程の編成方針をふまえて大学がカリキュラムを自主的に編成できるようにするとともに、教育の質を維持向上するために各大学が行なう自己点検評価に関する努力義務が規定されました。それ以後各大学でカリキュラム改革が進められることになったわけです。

●375校が実施したカリキュラム改革

文部省の調べでは平成6年度までにカリキュラム改革を実施した大学は375校で全国の約3分の2に当たり、科目区分を見直した大学の数は実に419校に上ります。

改革の実例としてはカリキュラムに高等学校の学習歴を配慮したところが240校あり、英語や数学で学力別クラス編成や単位に認定しない補習授業を実施しています。また、ゼミや実験、外国語科目を小人数のクラス編成にしたところが多く、1年次からゼミナル形式で授業を開講する大学も増えていきます。

カリキュラム改革の大きな動きのひとつは国立大学の教養部改組です。平成4年の神戸大学と京都大学の改組に始まって、30校に置かれていた教養部は平成8年度には6校に減ります。教養部を廃止する場合、新学部を作って全学的に教員を再配置したところと、教養部にいた教員が既存学部へ分属し、各学部と大学院の充実をはかったところがありま

②

す。どちらも全学出動体制といって専門学部
にいた教官も1年生向けの授業を担当したり、他学部の学生に専門科目を開放したりしています。こうした動きは、ある科目が学生によって教養にも専門にもなるから単純な科目区分は意味がないという大学設置基準の大綱化の背景にある考え方によるものです。

●教養部見直しを支援

先の答申では、文部省は教養部と専門学部の意志疎通のために教養部の見直しを支援するとあって、廃止というスタンスは取っていません。時々教養部廃止は文部省の指導だと言われることがありますが、そのようなことはなく、各大学からの要求に基づいて、進められていくのが実態です。

ですから文部省は今回の改革でも教養教育を重要視しているのですが、大学の内部では教養教育を減らして単に1年次から専門的な教育をしようという議論もあるようです。また学生の自主性を養うという趣旨で自由選択を大幅に取り入れる大学もあるようですが、育てたい学生像があつてカリキュラムを改革しているならば、体系化されたカリキュラムがあり、必修科目やガイダンスで学生を誘導することがあつて当然だと思えます。

さらに全学出動体制についても、1〜2年生を対象としたゼミナル形式の小人教授授業のように手間のかかる授業科目を旧教養部の教官だけが担当するようなことがあれば、問題があるでしょう。教養部にいた教員と専門学部
にいた教員の間はまだ厚い壁が残っている大学もあるのではないのでしょうか。

●進展しつつある教育方法の改善

大学審議会は答申のなかで教育方法の具体的な改善策としてシラバスの作成、学生による授業評価とFDの導入を挙げました。そのうち平成6年度現在でシラバスの作成は176校に、学生による授業評価は138校にまで増えました。

またセメスター制を導入する大学も増えました。セメスター制は、例えば、週1回通年4単位の授業を週2回半年に集中させて効果的な学習を図ることに導入の意義があります。ところが実際には、週1回の授業のまま前期と後期の2単位ずつにわけてセメスター制にしたという大学があります。しかし、このようなセメスター制であつても前後期が必修でなければ、後期で前期とは全く異なる科目を取ることができるので、学生に科目選択の幅が広がるという意義はありません。

シラバスは、形式にこだわるものではないのですが、電話帳のようなものだという考え方が広がって、それをアメリカと比べて批判する方もいます。本来シラバスは学生との関係で存在しますが、私は教員にとっては電話帳形式のものも無意味ではないと考えています。まず様式を定めて全学の教員が記入することによって、教員が自分の授業の構成や教材について改めて考えてみる機会を与えています。また、カリキュラムが一望できて授業科目間の関連性もわかるので、学科や学部のなかで教員同士がカリキュラムについての議論をする材料にもなります。



むらた なおき
1956年生まれ。1978年に文部省入省。総
理府臨時教育審議会、外務省、文化庁、兵
庫県教育委員会などを経て、現職。

●実現したい双方向の授業

しかし、もっと重要なのは、一方通行の授業を形式的にシラバスの様式に当てはめるのではなく、教員が学生に提供できる内容と学生に求める学習の課題を書き込み、双方向性の授業を実現することです。学生がいつも持ち歩いて使うシラバスを実現するには、教授法の改善がぜひとも必要です。

学生による授業評価は、結果の妥当性に疑心暗鬼の教員がいて、導入に対する抵抗があるようですが、実際に実施してみると甘い教員に高い点数をつけるほど学生も幼稚ではなく、教員からも一定の評価があるようです。初めの頃は、結果を非公開にするなど教員の抵抗を減らして導入することが少なくないようですが、いずれは学生へのフィードバックや授業方法の改善にまで結びつけていく努力が必要でしょう。

低調なのがFD活動で、各大学の工夫とともに、まさにこうしたセミナー・ハウスの活動が活発になることが重要です。大学で滞っているだけに、こうした大学間の研修会が必要で今後も充実していかなければなりません。

●組織制度の改革から中身の改革へ

大綱化に伴って8割の大学が自己点検評価の規定を整備し、約3分の1の大学が結果を公表しました。評価の妥当性や客観性を保つためには、公表して外部の目に触れたほうが望ましいと思います。現状の問題点は、多く

の大学では点検どまりであること、書式が定まるとやがて作業がルーティン化し、点検評価の仕組み自体が形骸化するおそれがあることです。改革から5年経っても評価まで踏み込まず結果として見るものがなければ、やっぱり大学の教員に任せておいてはだめだということになります。外部の声を反映させるなど工夫して評価に踏み込むことが緊要な課題です。

大学改革については、学内でも大学審議会の答申に目を通したり、世間の批判にさらされて日々苦闘している改革の委員と、その他の教員には意識にギャップがあります。学内では意識がほとんど変わっていないので改革への反応が鈍く企画倒れになりかねません。教員の意識が変わらなければ、我々が手伝っても組織や制度の改革から中身へ進みません。とくに専門学部が一般教育へ注文をつけることが多いのですが、課題はむしろ専門教育に多く残されているでしょう。大学で何を学んできたかが問われつつある今日、専門教育の再検討が必要なのにもかかわらず、専門教育の内容に踏みこんだ議論があまり行なわれていません。

学内の意識を変えて教養部改組を中身の改革まで結びつけなければ本当のカリキュラム改革になりません。ところが形式的な組織改革だけで多くのエネルギーを消費してしまっているのが現状ではないでしょうか。

●質の高い授業の展開を

日本では大学は入りにくくて出やすいとい

う通念があるので、逆のスローガンが世間受けします。入学定員の規制を外して卒業定員を絞るといった議論は、冬の時代を迎える大学にとっても魅力的かも知れません。しかし、たくさん入学させて、悪くなつた教育条件のもとで、学生を学ばせて振り落とすというのは教育としていかがなものでしょうか。入口出口論は本来、数の問題ではなく質の問題です。教育する側が授業を見直す努力なしに成績評価だけを厳しくしても、入りやすく出ていく大学とはいえません。カリキュラム改革を更に進め、教育の質を高める努力が不可欠です。

もちろん成績評価のあり方についても、改善と工夫が必要でしょう。一定比率以上に優秀をつけた教員には評価をやり直してもらおうなどルールを設ける大学もあるようです。青森公立大学が導入したグレード・ポイント制度なども参考になると思います。

また多くの大学では、学生がたくさん授業科目を登録し、楽に及第できる科目やまじめに出席した科目だけ試験を受けて卒業ができます。それは履修を登録しても試験の登録をせずに受けなければ初めから科目登録していかないのと同じ扱いになるからです。このような状況の下では学生の自宅学習という概念の実質化をはかって卒業必要単位を減らしても、質の高い学習を期待できません。試験の仕組みにも工夫が必要でしょう。

最後に、各改革項目を関連づけて大学全体の改革へ進むことと、シラバスや学生評価、FD活動を各大学の目標に関連づけて展開することが今後の課題ではないでしょうか。

(文責・編集者)

電子メディアと 21世紀のライフスタイル

▼主題講演

千葉大学文学部教授 土屋 俊氏

▼セクシオン演習

A ネットワーク社会の中での人間関係と教育、そして道具
日本電信電話株式会社基礎研究所
主任研究員 野島久雄氏

B 近未来のパーソナルコンピュータとユーザ環境—ドキュメンテーションを軸として—
テクニカルライター 檜山正幸氏

C 障害を持つ人達と、コンピュータ・ネットワーク
プロップ・ステーション代表 竹中ナミ氏

D デジタル・ネットワーク社会における法の変容—電子取引、知的財産、情報プライバシー、ネチズン—
一橋大学法学部教授 松本恒雄氏

E デジタル社会とマスメディア
静岡大学情報学部教授 合庭 惇氏

【運営委員】

千葉大学文学部教授 土屋 俊氏

【参加状況】 37名18校 (内女子15名)

千葉(4)、慶応義塾(3)、一橋・東京都立・津田塾・東京女子・明治(各2)、東北・東京・東京外国語・東京学芸・横浜国立・九州・駿河台・青山学院・国際

基督教・中央・東京薬科(各1)、その他 (9)

二十世紀に残された5年間は、政治経済における大きな破綻がなければ、「電子化の5年間」となるであろう。すでに日本においても、一九八〇年代から日常生活のさまざまな局面が計算機を利用した形態に変化してきたが、一九九三年アメリカ合衆国クリントン・ゴア政権によって提唱された「国家情報基盤(NII)」計画の登場以来、二十世紀の残りの年月が生活の全般にわたる電子化を中心として進むことが確定的となった。そして、二十一世紀になるとわれわれはコンピュータと共生しつつ電子的生活を営むことになるであろう。

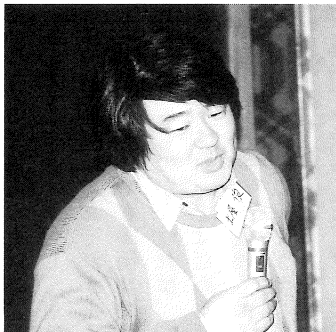
しかし、そのような電子化された日常生活がどのような生活であるのか。現在のライフスタイルから二十一世紀のライフスタイルに移行するために必要な条件は何であり、それは本当に整っているのか。このような疑問に対して解答を与えること、いや、すくなくとも解答を与える努力をすることは一九九五年に生きるわれわれの義務である。この共同セミナーのもっとも重要な趣旨は、一九九五年

④

の最後の月にこの義務をはたすことである。

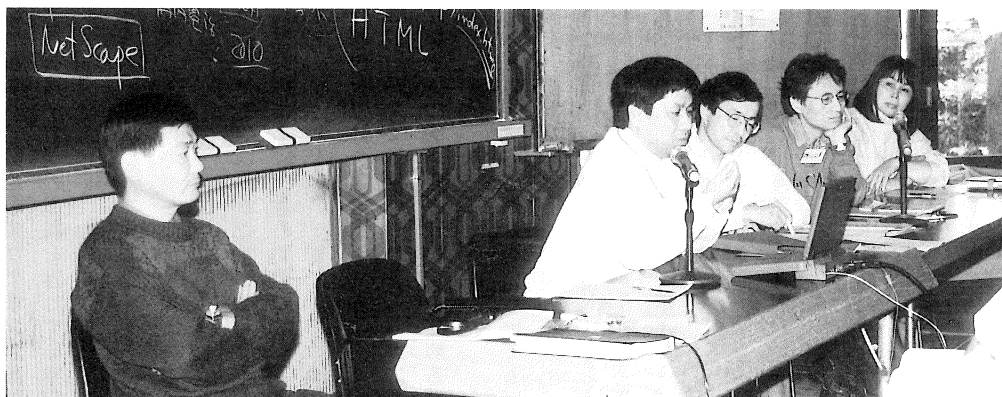
その努力のためには、基礎となる知識が必要であるが、コンピュータを中心とする電子メディアについては、多くの場合、企業の広告やそれを仲介するマスコミによる明るい未来の約束がわれわれの知識のほとんどである。しかし、ことはそう簡単ではない。さまざまな電子メディアの登場によって、身近な知的生活(文房具、読書、新聞、娯楽)はどのように変化するか。電子メールによって情報交換の形態が変化することは対面・電話・手紙を基礎としてきた今までの人間関係をどのように変化させ、それは、たとえば教育や法的関係をどのように変えるのか。二十世紀の理念であった福祉国家の実現は、本当に電子化によって促進されるのか。それとも、電子化された社会はかえって、たとえば障害者や老人にとっては住みにくい社会になりはしないのだろうか。

今回のセミナーでは、これらの問題に



主題に触れる運営委員の土屋氏

ついて現在の段階でわかることが何かをよく理解し、その理解に基づいて二十一世紀のライフスタイルを構想し、そしてそのために必要な準備は何かを明らかにすることがねらいであった。



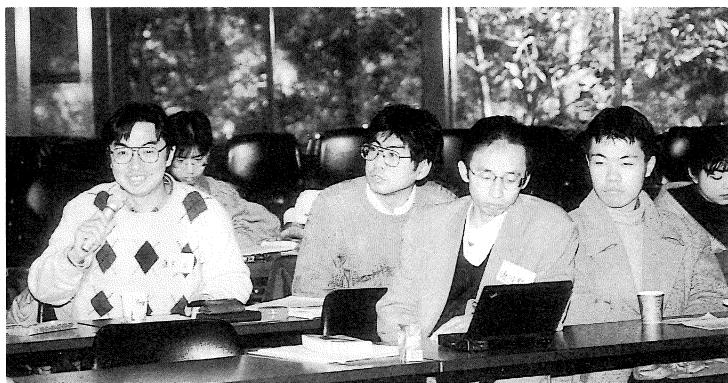
左より合庭、野島、松本、檜山、竹中の各氏——シンポジウムより

第3の視点が必要なコンピュータと人間の関係

東京都立大学人文学部2年 中井 聡

私の参加動機は、障害者の社会参加を広げる可能性を探ることでした。この当初の動機からは離れてしまっただけでも、広く技術と人間関係を考えるきっかけとなりました。

今日、自動車に乗ることが一般化し、非常に便利になりました。他方、収入の何割かを自動車に支出し、また交通渋滞



ノートパソコンでノートをとる学生が多く見られた
——全体会での討論風景

や環境悪化、交通事故などの問題も起こしています。人間の可能性を広げるための技術に、メリットとデメリットがあることは、コンピュータについても、それが技術（道具）である以上、避けられないことのようにです。

メリットとしては、労働生産性が上がります。今まで複数の人間が携わっていた仕事と同じ量を、一人の人間がこなすことが可能になりました。また、職場の風通しを良くして、今まで自由に自分の能力を活かせなかった層が、実力を発揮できるようになりました。

デメリットとして、これはメリットの裏返しになるのですが、労働の強化、能力主義の徹底化などが考えられました。経済発展について、近代化論と従属論という言葉があります。西欧社会がたどったような工業化、お金の換算できる活動の拡大を追うことが是とされる近代化論、それに対して、西欧型を追って貿易を拡大するほど儲けは先進国に取られてしまうという従属論。このふたつの対立に対して、最近、内発的発展論という言葉が語られ始めています。その国の文化や技術、生活にあった形の発展が考えられるべきであると。

コンピュータの普及と人間の関係についても同様な第3の視点が考えられるべきであり、その視点を提供できるのが障害者の存在であると思いました。シフトキーやコントロールキーなど同時にふたつのキーを押すことが困難な方のために考え出されたステッキなどは、便利です。

現在の与えられた環境に疑問を持ち、環境を変える視点が大切であると感じます。技術を抽象論で考えることは、地に足がついていないだけでなく、間違った結論を導く可能性があります。その意味では、ビットマップ (Bitmap) 16進数の並び) からミッキーマウスの絵を作った経験が、今後活かされるのではないかと思います。

この感想文を書く直前、ハードディスクが壊れてしまい、この道具の脆弱性を再認識しましたが、便利なので結局この道具で書いています。

ネットワーク化によって社会の根本的な変革が迫られる

横浜国立大学大学院研究生 松本 宏

今回のセミナーは、話題のマルチメディアを取り扱うということもあって、多数の参加が予測され、選考落ちの覚悟をしていたが、蓋を開けてみれば、みな12月の寒さに敬遠したのか、30余名の参加であった。しかし、その内容は、屋外での冷たい空気とは対照的に、白熱した議論が交わされ、質の高いものとなったように思われる。

このセミナーで鍵となったのが、「変化」への対応であった。すなわち、コンピュータに代表される技術革新とともに生じつつある、または、もう既に生じている環境の変化の波に、私たちが、善かれ悪しかれ、どう対応していくかが問題となったのである。というのも、コンピュータがもたらす高度のデジタル化、ネ

ットワーク化は、コミュニケーションを円滑にしたり、事務作業を容易にしたりするだけでなく、それを取り扱う人間や、社会全体に、根本的な変革を迫ることになるからである。

たとえば、どの人間も、ネットワーク上において平等に取り扱われることは、健常者、障害者といったネットワーク外での差異を無意味にするし、かえって、ネットワーク上で、すべてを表現しなくてはならないがゆえに、表現能力といったものが、これまで以上に問われることになってくるのである。

私自身が参加したDセクションでは、法の世界における「変化」への対応を概観した。商取引におけるEDI化、マルチメディアでの著作権の取り扱い、個人情報・プライバシー、通信の国際的管轄権、刑法上の用語の問題など、その内容は非常に幅広く、かつ複雑さを極めていた。全体としては議論を重ねることができたが、私自身は、専門的な議論についていけないこともしばしばであった。

このセミナー全体を振り返って、私はこの電子メディアによる変化は、もはや個人がとめられるものではなく、社会全体としての変化は否応なく進行していくように思われた。もちろん、喧伝されるような変化による「光」の部分の裏には、ますます「影」の部分が広がっている。それがゆえに、明るさをもたらすし、闇を狭めていく具体的な施策を生み出していく必要性を、関心が薄かった私でさえ、ひしひしと感じることができた。

⑤

カリキュラム改革で 大学の中身を変えるには

▼講演

カリキュラム改革の現状と課題

文部省高等教育局大学改革推進室長

村田直樹氏

▼事例報告

1 千葉大学教養部廃止のまあとと
千葉大学園芸学部教授 山内正平氏

2 早稲田大学理工学部のカリキュラム改革
早稲田大学理工学部教授・教務部長 白井克彦氏

3 慶応義塾大学SFCのカリキュラム改革と事務の役割
慶応義塾大学人事部長 孫福 弘氏

【参加者】82名60校(内女子3名、講師・運営委員は除く)

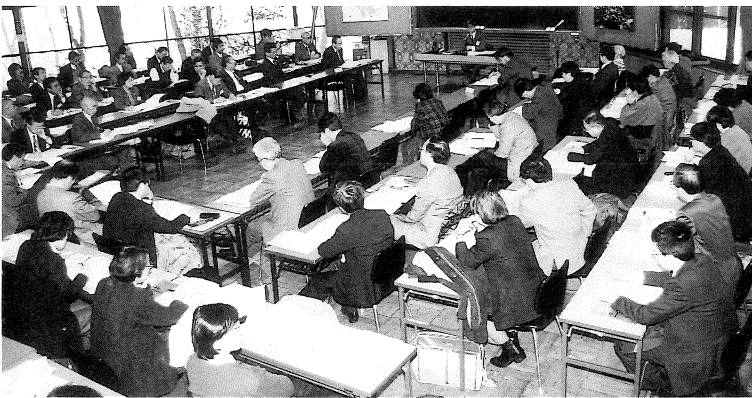
芝浦工業(5名)、国際基督教・防衛(各4)、琉球・武蔵工業(各3)、東京医科歯科・東京外国語・東京農工・徳島・鹿児島・亜細亜・専修・早稲田(各2)、室蘭工業・電気通信・東京商船・福井医科・岐阜・神戸・広島・鳴門教育・東京都立科学技術・都留文科・岐阜薬科・大阪府立看護・姫路工業・北星学園・八戸・足利工業・跡見学園女子・文教・東京基督教・東京歯科・大妻女子・桜美林・杏林・慶応義塾・恵泉女学園・白百合女子・大

東文化・多摩美術・中央・東海・東京家政学院・東京工科・東京農業・東京理科・日本女子・明星・立教・神奈川工科・東洋英和女学院・新潟産業・岐阜女子・静岡産業・愛知・中部・名古屋外国語・京都外国語・高野山(各1)

◆ 大学設置基準の改正から早くも四年半が経過した。この間、それぞれの大学は教育と研究の活性化を目指し、こぞって個性的なカリキュラムの開発に努力してきた。しかし、恐らく今暫くの間は、いろいろと試行錯誤を重ねなければならぬが、今こそまさに大学教員が力量を試す千載一遇の好機といえるだろう。

そこで今回の研修会では、先ず最初に、昨今のわが国におけるカリキュラム改革の全貌と、既に先導的な試みを行なった大学の事例を、その衝に当たられた方に事例報告をお願いした。

次に、今後各大学で改革を進める際、どのような教育理念に基づいて新しいカリキュラムを策定しようとしているのか、具体的にはどのような到達目標と授業の内容および教授方法を選ぼうとしているのか、さらに、それらの教育活動を支援するためにはどのような組織の改編



先導的なカリキュラム改革の事例報告をめぐって白熱した討論が展開された——講堂にて

と人的・物的・財的資源の確保が必要か。お互いに情報を交換しながら、大学教員として果たすべき役割について討議した。

プログラムは、文部省の村田氏の講演

(詳細は巻頭頁参照)に始まり、山内・白井・孫福の三氏による事例報告があった後、分科会に分かれて個別に討論した。ここでは紙面の関係で詳細を報告できないので、二つの分科会のレポートと孫福氏の講演要旨(8頁参照)を掲げ、報告としたい。

●山内氏を囲んで 基本路線が徹底していなかった 教養部廃止

東京農工大学農学部教授 亀山純生

この分科会では、山内正平氏の報告「千葉大学教養部廃止のまあとと」をめぐって討論が行われた。

この報告で山内氏は、千葉大学で教養教育の発展を目指した新学部構想がなぜ教養部廃止と既存学部への教養部教官の分属という結果に終わったのか、と問いを發して、改組の前後の一般教育体制の問題点を紹介された。

改組前では、教養部自身の研究組織化志向、専門教育カリキュラムの無知と一般教育の一面的主張、逆に教養教育の全学支援体制の未確立などが、改組後の「普遍教育」全学出動体制においては、責任体制の弱体化、上意下達の傾向、普遍教育予算の不明朗化、担当者の固定化傾向とボランティア化などが問題点としてあげられる。

「誰が教養部廃止を願ったか」「教養部廃止とは何であったのか」と、悲痛なまでに自問する山内氏の問題提起は、教養部改組に通常つきまとう外的要因を別にすれば、次の点にその最大のポイントがあった。

すなわち、大学教育と一般教育の関係の議論、カリキュラム改革論議をベースにした大学全体の改組という、大学改革のルーチンとも言うべき基本路線が教官団内部で徹底しなかった。それが、改組過程では曖昧なままに教養部廃止を不可逆の流れとし、改組後の問題は根底をなす、と。

全国から集まった参加者の中には、目下教養部改組の渦中にいたり、改組後の一般教育体制の不安定さに問題を感じている人も多く、討論では、千葉大学や各大学の現状の具体的な質疑および情報交換と、山内氏の問題



千葉大学教養部の事例を報告する山内氏（右）

提起にそった本音の議論がホットに行なわれた。

第一に、大綱化、特に教員の二重構造・格差の廃止と専門と一般教育の有機的連関の基本方向の積極的意義を承認した上で、なお、固有の一般教育責任主体が必要か否かの問題。

すなわち、①専門教育から相対的に自立したした大学教育全体の見地から、独自に一般教育を担い論議する教員集団の必要性如何。それが結局、旧教養部感覚と専門学部の教養軽視傾向の温存につながる危険。②今日の単線型の高校教育の下で、いわゆる異分野の専門教育（概論など）教養教育論が成立しうるか否か。固有の教養学はそもそも可能か。③単科大学の場合、学部の専門外の一般教育科目専任教員は不要か、外注（非常勤）でよいのか。

第二に、一般教育部局の改組と学部分属における、教員の研究要求の位置づけをめぐる問題点。それは、大学院重視傾向の中で学部教育の性格の見直しと、大学の学生本意の教育機能の評価と関連を鋭く問うた。第三に、

教養部改組をめぐる（外圧）と内部の教員の待遇問題（研究条件、負担等）の中で教育改革の自主性をどう発揮するかの問題。

これら三つは互いに入れ子構造のように関連し媒介しあっていることが、議論の中で明確化された。カリキュラム開発を軸とする大学改革の現実の構図と課題をあらためて確認したことである。

●白井氏を囲んで
二十一世紀の科学技術者育成
の方向を探る
東京女子大学文理学部教授 福田一郎

この分科会では、「早稲田大学理工学部のカリキュラム改革」をめぐって、教務部長の白井克彦氏の事例報告をふまえて、主として理工・医歯薬学系の参加者20名が集まり、白熱した討論が行なわれた。

早大理工学部のカリキュラム改革の動因は、これまでの既存の科学技術者養成を反省し、批判して組み立てられたものであることが注目される。その改革の骨子は「基礎実験の重視」と「複合領域コースの導入」であった。

第一は、受験勉強ばかりで実験をほとんどやっていない一年生に対して、週の中で丸一日かけて、みっちり理工学基礎実験をやり、ものを創り出すことの真の意味を体得させること。

第二は、一・二年対象の総合科目で「科学と芸術」「企業行動と経営」「シミュレーション技術と文化」など従来の授業科目になかったものを開講。二・三年対象の基礎科目では「現代宗教論」「芸術表現」「コンピュータアーキテクチャ」など、三・四年対象では、「生命倫理」「電子産業論」なども開講した。それらをふまえて四年生に対しては、従来の学科別卒業論文に加えて、「科学方法論」「科学技術政策」「記号現象に関する基礎研究」「言語研究」から選



早稲田大学理工学部の事例を報告する白井氏（右）

択する方法を導入した。現在学生の側からも高い評価を受けつつ、好調に進行している、との報告があった。

これに対し、従来の専門技術教育カリキュラムとの比較、実験の具体的クラス分け、全体として履習単位減の制約、医業分野における国家試験との関連、実験科学の授業方法、さらに大学院との関連、災害に対する工学系学問体系の再編成へと話題がふくらみ、熱心な協議がなされた。

現在、カリキュラム改革論が盛んで、シラバスの導入、学生評価、自己点検など、どこかの大学でも一定の方向に進捗しているが、その結果、多様性が失われ、似たりよったりの大学が増えつつある。今こそ、特色のある個性的な大学が、特に理工、医薬系のなかで問われるのではないか。

早大理工学部の新カリキュラム案のなか

「ポランティア論」「ポランティア活動」というのがあったが、「ポランティア論」なんてあるのか、それを授業科目に入れ、これに単位を与えるという案はいかなるものか。

これらの科目以外に最近、スポーツや英検などの資格を単位履習として認定する大学が増えているようであるが、科学技術者、医業学士育成の立場からどのように考えたらいいのか。このような発言があり、この問題をめぐって、関西地区、関東地区の大学の事例報告、情報交換、大学というより個人的立場からの意見が沸騰した。

たしかに、理工系、医薬系の大学の使命は社会と密接に関連しており、社会の動向の上でカリキュラムの構築が必要であるが、理工系の場合でも「その道の職業人になろうと、研究者になろうと、結局は人間教育が基盤である」といわれた白井氏の言葉が強く印象に残った。カリキュラム改革の基盤もそこにあると言えるのではなからうか。



急遽、神戸大学の事例をめぐって討論する分科会が設けられた——報告する神戸大学国際文化部教授・瀧上凱令氏（左から2人目）

慶応義塾大学SFCのカリキュラム改革と事務局の役割

慶応義塾大学人事部長 孫福 弘



まごかく・ひろむ
一九四〇年生まれ
慶応義塾大学SFC
創設に関わる。共著
『私立大学のマネジ
メント』他。

SFCのカリキュラム改革のなかで事務局がどう関わったのか、どのような役割を果たすことが出来たのか。事務局側の自己評価、自己点検としてあくまでも主観的、印象的な評価を試みたい。

●改革を自己評価すると

自己評価するにあたり、客観的な評価基準はないが、まず中心的な役割を果たすことができたレベル、教員と協同して改革に貢献できたレベル、理解と受容が十分であった、すなわち改革の足を引っ張らなかつたというレベルの三つにわけ評価してみよう。事務局が新しいアイデアやコンセプトになかなか理解を示さないために一向に改革が実現しないとされることがあるが、それに対してどうだったのか。

改革の第一段階、すなわちコンセプトやビジョンを描く過程では、教員と協同しながら貢献するところまではいかなかったが、それを理解し受容するという点では十分であった。第二段階、制度・システムを構築するという過程では、明らかに協同貢献できたが、より積極的に中心的な役割を果たせたかどうかといえ、十分ではなかった。最後の制度運用の段階では、中心的役割を果たすことができた。

理想をいえば、第一段階でも事務局が十分に協同貢献できなかったといけないのではないか。第二段階の制度構築レベルでは、中心的・先導的な役割を少なくと

も半分以上は担うところまでいくべきではないか。

●教育から学習へ

次に、SFCの経験を通じて、これからの教員・職員・学生の関係のあり方を考えてみたい。

これまでの大学教育は、知識伝授型の授業が中心であったが、SFCの経験からみると、これからの教育のイノベーションは創造性開発型でいくべきではないか。カリキュラムの基本的な考え方は「何を(what)」「いつ(when)」教えるかということから発想されていた。あくまでも教育の立場からカリキュラムを組むことが要請されている。

それに対して、これからは「なぜ(why)学びたいか」「いかに(How)学ぶか」が問題になってくる。教授法という言い方にこだわらずに、むしろ学習を主体にした学習法、如何に学ぶかという所までを考えてカリキュラムを構想する必要があるのでないか。

さらに、学生の学習意欲を大事にするカリキュラムが生まれ、それが実現されないと教育する側の論理を押しつける結果になり、学習意欲が無視されるのではないか。カリキュラムを考えるときには、狭い意味でのカリキュラムだけでなく、教授法・学習法・学習の動機づけ・学習支援環境といったものを同時に考えながら、幅広く全体とのリンクを考える必要がある。

●学習支援が課題

ところで、教育と研究が大学の使命であるといわれてきたが、これからは学生の学習が大学における究極の使命ではないか。学習が中心にあつてそれをいかに達成させるかという意味で教育が存在するのではないか。図書館の機能や情報ネットワークの機能、あるいは様々な学習支援のサポートの機能、例えば学生の学習をアドバイザーとかカウンセラー、あるいはコンサルタントの機能も当然でなくてはならない。

FDも教育の質をどう上げていくかという形でファカルティが自らをディベロップメントすることは非常に結構だが、もう一歩進めて教員・職員・学生の三者が学習についてどう考えるか、学習の実態を理論的にどう理解するのか、あるいは総合的な学習が実現するためにどうしたらいいのか、そのための学習環境をどう考えた方がいいのかということを研究していく場が本来あるべきではないか。そういうことを大学のコア活動の一つとしてきちんと位置づけることが必要だ。

●職員の能力をどう育成するか

大学改革は、一種の永久改革でなければ本当の改革ではない。そのためには学内にこれを専門に考えるような人材を育てていくことが必要だ。もちろんその人に任せておけばいいというわけではなく、教員のビジョン・コンセプト・アイ

ディアも取り込みつつ、それが十全な形で実現しなければいけない。しかし教員だけではできないこともあきらかで、本来なら職員に加えて学生も改革に参加すべきだ。

ここで職員の重要性を主張したいが、残念ながら職員はそれに堪え得るだけの能力を育てていないことも事実だ。その意味で職員をまず育てることが大学にとって重要なことだ。慶応大では、職員の能力の高度化を目標に、学内の大学院である経営管理研究科と政策メディア研究科に去年から若手の優秀な職員を一人ずつ2年間送り込み、マスターを取らせることにしている。

また、これからの時代に合うような職員の能力といっても、新卒を採用して学内で育てるだけでは不十分なので、アメリカのビジネス・スクールでMBAを取ってきた人たちの中途採用を始めた。こうした教育訓練と同時に、学部運営の会議に職員を実際に参加させることが職員を育てるときの一つの鍵になるのだろう。そして職員が力をつけてくれば、それに見合うような責任ある仕事とポストを与えることが大事だ。現在は大学・学部の運営の重要なポストは教員が兼務しているが、これからは教員・職員という職種にこだわらずにそれにふさわしい能力、識見のある人をそのポストにつけるという原則を確立しなければならぬのではないか。

SFCの改革も辛口に言えば職員はまだ力不足であったといえるだろうし、それが現在でもややマイナスイメージとして残っているのではないか。よりよい大学改革を推進するためのひとつの柱として職員を育てることを考えてほしい。

文学の方法——漱石を仲立ちとして——

▼ゲスト講演

『續明暗』の前と後——私にとっての「漱石」なるものの変容

作家 水村美苗氏

▼セクション演習

A 構造・語り手・脱構築——『こころ』を例にして——

B 成城大学文芸学部助教授 石原千秋氏
活字と肉筆のあいだ——『心』（こころ）と『明暗』を中心に——

C 学習院大学文学部教授 十川信介氏
夏目漱石の作品内における、徳川文芸的要素と西洋文学的要素の対立・葛藤

D 大阪大学言語文化学部講師 小谷野敦氏
記号論・都市論・メディア論、そしてカルチュラル・スタディーズの方へ

東京大学教養学部助教授 小森陽一氏
(注) AとBセクションは合同で実施した。

【運営委員】

東京大学教養学部助教授 小森陽一氏
明治学院大学文学部教授 宇波 彰氏

【参加状況】 29名18校（内女子20名）

東京・立教（各3）、お茶の水女子・慶応義塾・成蹊（各2）、筑波・一橋・東京農工・東京都立・独協・国際基督教・成城・東京農業・武蔵・明治学院・早稲田・女子美術・共立女子短期（各1）、その他（4）

一九六〇年代から八〇年代にかけて、日本においても、記号論・言語論・表象論の全領域にわたって、「文学の方法」と批評理論をめぐって活気に満ちた議論が展開された。もちろん、それらの多くが、欧米の批評家、とりわけフランスの現代思想家たちの理論的成果の翻訳と紹介によってもたらされたことは、一つの事実として受けとめておかなければならないだろう。あるときは、新しい概念の商標登

録競争かと思われような事態も発生した。新しい理論書が翻訳紹介されるたびに、これこそがすべての問題を解決する特效薬であるかのように錯覚する、輸入超過国特有の悲しい誤解が生まれることもあった。

しかし、九〇年代に入ってから、あたかも大理論の時代は終わったかのように、「文学の方法」をめぐる議論は姿を消してしまった。そして台風と津波が過ぎ去った後のように、新しい波に怯えていた人々の顔にも忘却のためのやすらぎの表情すら見え隠れするようになった。

作品論か作家論かといった「方法なき方法」の議論をしていた日本近代文学研究の領域でも、「文学の方法」をめぐる議論が存在しなかったわけではないが、それによって一つの学問領域としてのディシプリンが共有されたわけでもない。

参加者の感想から

社会人 早川美由紀

例えば「三四郎」の冒頭のたった二ページを読むにしても、「ああも読めるし、こうも読める」というように読みの可能性が際限なく湧いてくることは素晴らしいことであるはずだった。

その読みの多様性に出会いたくてグループの皆で頭を捻った。しかし、「いざ「ああも」「こうも」と何十通りもの読み方が飛び交う現場に立ってみると、それぞれの読みが食い違つて収拾がつかないように感じて焦り困惑したのは、自分でも驚きだった。

一人一人が独自の存在であることの自然な結果として一人一人が独自の方向を向いた読

六〇年代から八〇年代にかけての、多様な方法論を、横並びに、かつ批判的に見ることができるようになった現在こそ、実は最も生産的に「文学の方法」について考えることのできる時期なのではないだろうか。

おりしも、ポスト・コロニアリズムの状況の中で、これまでの「文学の方法」総体を、批判的に再検討する試みが、世界的動向としておこりつつある。ディコンストラクションの波によつて、真理／誤謬、自然／文化、未開／文明、パロル／エリクチュール、男性／女性、まじめ／戯れといった、あらゆる二項対立を転覆させる認識の布置を獲得したうえで、性、民族、国家、メディア、身体といったあらゆる領域での批評を可能にする「文学の方法」を編み出す場を創るときがきていると思う。

その媒介者として、夏目漱石を選んだのは、彼の小説の全実践が、「文学の方法」をめぐる批評的意識によつて貫かれているからであり、「文学」とその外部を架橋する可能性に満ち、多くの人々がそれぞれの言葉を交通させることのできる場になるからにはかならない。

「お互い違う読みなんだね、ふうん」では納得がいかない。多様性が顕在化してくる中でしか見えてこない何かを期待したいと思つていた。しかし、私は多様な読みの中で立ち止んでしまったようだ。最初のハードルとして異質さに直面したときの緊張があつたようには自分にとって快適なことだろうかと思つた。そのうちに身構えていたように思う。

⑨



前列左より小谷野、十川、宇波、岡（館長）、水村、小森、石原の各氏——ようこそ広場にて

異質なものが自分に近づいてきたとき、それを受け入れようとすれば人は変容を迫られる。自分の中の何かを変えなければ新しいものと対応できないからである。異質であればあるほど決定的な変容を迫られる。誰かとは何かと関わろうとすれば変容のプロセスは避けて通れない。だから関わるには意志も勇氣もいる。

必要なのは、「では、こう読んでいる自分は何？」そう読んでいるあなたは何か？」と勇氣を出して問うてみるのだと思う。そうすれば、異質であることが対話を生み出す。お互いがそれぞれの明確な意志のもとに異質さを超えて関わることは是非とも必要であると思う。

それは時としてつらいけれども創造的な作業であるはずだ。孤独でバラバラな世界を脱して、豊かな本当の意味で多様性のある世界を創るためにも。

平成7年度
教育プログラム白書

表1 平成7年度教育プログラム開催状況

■大学共同セミナー

回数	期間	主 題	講師・運営委員	参加人数
第167回	平成7年 10月27～29日 (2泊3日)	民主化の比較政治学	伊東孝之*、鈴木佑司、若松 隆、吉川洋子、 遅野井茂雄、永綱憲悟、川原 彰	29名 (16校)
第168回	12月8～10日 (2泊3日)	電子メディアと21世紀の ライフスタイル	土屋 俊*、野島久雄、檜山正幸、竹中ナミ、 松本恒雄、合庭 惇	37名 (18校)
第169回	平成8年 3月8～10日 (2泊3日)	文学の方法 —漱石を仲立ちとして—	水村美苗、石原千秋、小森陽一*、十川信介、 小谷野敦、(宇波 彰)	29名 (18校)

■大学院共同セミナー

第14回	平成7年 6月16～18日 (2泊3日)	ヨーロッパのアイデンティティ —統合の現在、その光と影—	仲井 斌、木畑洋一、宮島 喬*、伊藤るり、 原 聖	43名 (21校)
------	----------------------------	---------------------------------	------------------------------	--------------

■大学教員懇談会

第32回	平成7年 10月7～8日 (1泊2日)	学問への動機づけはいかにあるべきか	潮木守一、村上 健、後藤康夫、深谷和子、 田丸謙二、(八杉貞雄)、(小林志郎)、 (徳重昌志)、(石川 謙)、(松岡信之)	47名 (39校)
------	---------------------------	-------------------	---	--------------

■大学教員研修プログラム

第10回	平成7年 9月23～24日 (1泊2日)	単位制度の空洞化に挑む	岡 宏子、原 一雄、佐々木一也、井下 理	58名 (52校)
第11回	平成8年 1月20～21日 (1泊2日)	カリキュラム改革で大学の 中身を変えるには	村田直樹、山内正平、白井克彦、孫福 弘	82名 (60校)

■国際学生セミナー

第22回	平成7年 11月24～26日 (2泊3日)	アジア・太平洋地域の行方 —そのシナリオを考える—	宇佐美滋、朱 建榮、関場誓子、今川瑛一、 笠井信幸、土山實男、小川伸一、佐藤英夫*、 古城佳子*、(滝田賢治)	89名 (29校)
------	-----------------------------	------------------------------	---	--------------

注。*印は運営委員を兼ねた講師。()内は運営委員。参加人数は講師・運営委員を含まない。

表2 平成7年度教育プログラム参加状況

大学名	男	女	計	大学名	男	女	計
東 北	1		1	成 蹊	3	3	6
筑 波	2	2	4	成 城		5	5
埼 玉	2		2	聖 心 女		1	1
千 葉	5	2	7	専 修 大	1		1
東 京	10	4	14	創 価 大	2	1	3
東 京 外 国 語		2	2	中 央 大	15	5	20
東 京 学 芸 大	1		1	津 田 大		4	4
東 京 農 工 大		1	1	東 海 大	2		2
東 京 工 業 大	1		1	東 京 女 子 大	1	3	3
お茶の水女子大		4	4	東 京 農 業 大	1	1	2
一 橋 大	3	2	5	東 京 大	1		1
横 浜 国 立 大	3		3	日 本 女 子 大	7	2	9
名 古 屋 大	1	1	2	日 法 大		2	2
奈 良 女 子 大		1	1	武 蔵 大	2		2
		1	1	明 治 大	1	2	3
国立小計(15校)	29	20	49	明 治 学 院 大	3		3
東 京 都 立 大	2	1	3	治 学 院 大	2	4	6
高 崎 経 済 大	1		1	立 教 大	5		5
公立小計(2校)	3	1	4	早 稲 大	9		13
駿 河 台 協 立 大	1		1	東 洋 英 和 女 子 大		2	2
独 文 科 院	1	1	2	女 子 美 術 大		1	1
千 葉 商 科 院	1		1	国 立 命 館 大	3		3
青 山 学 院 大	2	2	4	立 命 館 大	1		1
桜 美 大	4		4	私立小計(36校)	84	66	150
共 立 女 子 大		3	3	共立女子短期大		1	1
杏 林 大	1		1	放 送 大	1		1
慶 応 義 塾 大	13	13	26	短期・高専・その他(2校)	1	1	2
慶 応 義 塾 大		4	4	社 会 人	10	12	22
駒 沢 大	1		1	総合計(55校)	127	100	227
上 智 大	1	2	3				

注1. 計5回(第167～169回大学共同セミナー、第14回大学院共同セミナー、第22回国際学生セミナー)

注2. 総数227名のうち留学生は35名

平成7年度は表1に示す通り、大学共同セミナー3回、大学院共同セミナー1回、大学教員懇談会1回、大学教員研修プログラム2回、国際学生セミナー1回の都合8回を実施した。

表2は、学生を対象とするプログラムの計5回の大学別の参加状況表である。参加者総数は55校(昨年60校)・227名(同351名)であった。性別では男子127名(157名)に対して女子100名(194名)で27名ほど男子が上回った。大学共同セミナー1回の平均参加者数は31名(64名)で昨年と比べて半減してしまった。テーマ設定の適否を含めて、現代大学生の問題関心の変化を考慮しつつ、企画を慎重に立てる必要がある。

教職員を対象とする大学教員懇談会と大学教員研修プログラムは、年間3回を開催し、187名(159名)で約18%の増加であった。なかでも、大学教員研修プログラムは140名(114名)の参加者を集めた。またこの表には出ていないが、全国556大学に募集要項を送付した結果、北は北星学園大学から南は琉球大学に至るまで全国各地から参加者が得られた。FDプログラムに対する関心は年々広範囲なも

のようになってきている。最後に、これらのプログラムの企画・運営にあたられた共同セミナー委員会、大学教員懇談会企画委員会、大学教員研修プログラムの各委員、そして各セミナーで講師としてご奉仕下さった方々にも改めて感謝の意を表したい。

表1 利用者別宿泊延人数・グループ数

	グループ数	構成比 (%)	()内は前年度		1グループ平均人数
			宿泊延人数 (人)	構成比 (%)	
会員校	504(541)	57.1	24,873 (25,793)	47.0	32(33)
非会員校	121(156)	13.7	12,513 (12,373)	23.7	39(31)
大学連合	52(56)	5.9	3,474 (4,089)	6.6	36(37)
学術・教育団体	123(142)	14.0	6,304 (8,747)	11.9	32(37)
企業・社会人団体	82(104)	9.3	5,706 (8,704)	10.8	25(32)
合計	882(999)	100.0	52,870 (59,706)	100.0	33(34)

●年間の宿泊利用者五万二、八七〇人
平成7年度の宿泊利用者数は延べ五万二、八七〇人(月平均四、四〇六人)、グループ数は八八二(同七四)であった(表1)。対前年比は六、八三六人減で、特に企業・社会人団体の利用は、深刻な不況を反映して、前年度をさらに大きく下回った。一方、前年度に引き続き受け入れたマレーシア政府派遣留学生76名の3カ月にわたる長期滞在は延べ六、〇四七

図1 利用グループ別構成比

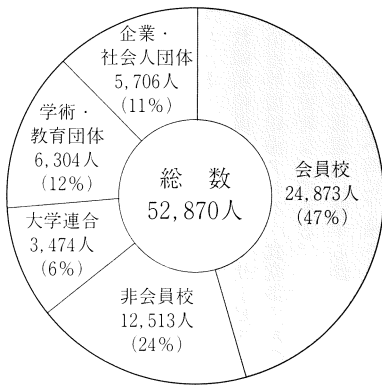


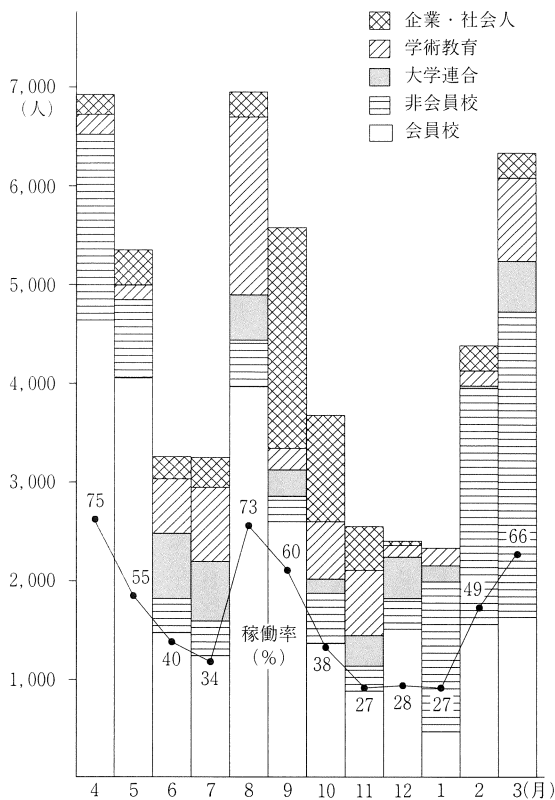
表2 協力会員校最多利用10校

順位	大学名	グループ数	順位	大学名	宿泊延人数
1	中央大学	55	1	中央大学	3,532
2	早稲田大学	30	2	早稲田大学	1,079
3	東京学芸大学	28	3	東京都立大学	948
4	東京都立大学	26	4	東妻女子大学	879
5	東京学芸大学	22	5	東京学芸大学	864
6	法政大学	21	6	明治大学	724
7	駒沢大学	17	7	お茶の水女子大学	668
8	明治大学	16	8	明星大学	637
8	日本大学	15	9	東京大学	598
8	東京理科大学	14	10	学習院大学	555

人に達した。この留学生の利用は今後も継続されることが予想されている。なお、開館から本年度末まで(30年9ヵ月間)の宿泊利用者数は延べ一四六万二、八九九人、グループ数は三万七に達した。

11

図2 月別・利用者別宿泊延人数と稼働率



●グループ別の利用状況
宿泊延べ人数全体に占めるグループ別の構成比は図1に示す通りである。「会員校」(本年度末現在計六七校)の利用は二万四、八七三人で、構成比は四七% (前年度四三%)であった。「大学連合」には当ハウス主催の各種プログラムをはじめ会員校の教師・学生が多数参加する集會が含まれているので、「会員校」の利用率は実質的にはこれより高い。「非会員校」を加えると大学関係の利用の構成比は計七七%となるが、一方、「学術・教育団体」にも大学関係者が相当数含まれている。

●年間の稼働率四八・二%
本年度の当ハウスの稼働日数は、年末年始の休館八泊分と6月の施設整備期間四泊分を差し引いた三五四日で、宿舍(収容定員三三〇人)の年間平均稼働率は四八・二% (前年度五四・五%)であった。図2に月別・利用者別の利用状況と稼働率を示したが、平均を下回る月は、例年同様、年度の後半、秋から冬にかけて多くなっている。

●グループ別の利用状況
上の合宿は計六六グループ(三二六校)、延べ九、三八〇人を数えた。
なお、ご参考までに、本年度最多利用の会員校一〇校を表2で紹介した。グループ数・宿泊延べ人数とも中央大学が平成元年度以来八年間連続で一位を維持したことになる。

●年間の稼働率四八・二%
本年度の当ハウスの稼働日数は、年末年始の休館八泊分と6月の施設整備期間四泊分を差し引いた三五四日で、宿舍(収容定員三三〇人)の年間平均稼働率は四八・二% (前年度五四・五%)であった。図2に月別・利用者別の利用状況と稼働率を示したが、平均を下回る月は、例年同様、年度の後半、秋から冬にかけて多くなっている。

平成7年度
第87回理事会・第67回評議員会

96年3月26日/アイビーホール

【出席者(順不同)】(理事)佐野博敏、岡宏子、中川秀恭、天城勲、小山宙丸、三宅彰、宇野重昭、山住正己、(評議員)板垣興一、梶井功、中嶋嶺雄、磯田浩、城塚登、朝倉孝吉、古浜庄一(代理・松本誠臣)

【委任状による者】理事11名、評議員65名

佐野理事長が議長となり議事が進められた。

岡専務理事から各議案について逐次提案説明があり、それぞれ質疑・審議の結果、いずれも原案通り承認された。

▽評議員人事に関する件

協力会員校・準協力会員校の学長交替に伴う東京医科歯科大学長鈴木章夫、東京外国語大学長中嶋嶺雄、青山学院大学長岡昭夫、明治学院大学長大場建治、順天堂大学長片山仁、国際基督教大学長絹川正吉、学習院大学長小倉芳彦、高千穂商科大学長原司郎、東京都立短期大学長水上忠各氏の評議員就任と、右記大学前学長の山本肇、原卓也、内藤昭一、福田敏一、石井昌三、大口邦雄、早川東三、福井守、二井房男各氏の評議員退任。

▽役員人事に関する件

東京外国語大学長中嶋嶺雄氏の理事就任。
▽協力会員校・準協力会員校の加盟・脱退等に関する件

東京工科大学の協力会員校加盟。産能短期大学の準協力会員校脱退。準協力会員校の東京都立商科短期大学と東京都立立川短期大学の二校が合併し、平成8年度より新たに東京都立短期大学として発足(これに伴い準協力会員校数は一校減)。

▽平成8年度事業計画案及び収支予算案に関する件

① 特徴的な事項で主なものは次の通りである。利用者延人数は、引き続き不況の影響下で

企業・社会人団体はじめ利用者全般の急速な増は望みず、前年度の実績を踏まえて五万三〇〇〇人と設定した。②協力会員校会費、利用料金はともに据え置きとする。③施設・設備の改修に伴う固定資産の取得及び修繕費に多額の支出を必要としているが、その主なものはユニット・ハウス宿舍群暖房配管の追加補修、教師館給湯設備の改修、サービスタワー浴室等用給湯タンク、食堂ホールのクーラーの一部更新などである。

▽就業規則等の諸規定に関する件

前回提案し、基本的に了承された就業規則改正案のうち、いくつかの条項及び附則(給与規定等)については「諸規定改正検討作業部会」での再点検と確認を必要とし、理事長に一任された。

平成8年度一般会計収支予算書

(平成8年4月1日～平成9年3月31日)

(単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
基本財産運用収入	88,000	人件費	118,373,400
会員校会費収入	64,400,000	施設管理費	46,814,000
事業収入	195,946,000	その他の管理費	25,947,200
施設改修協力金	9,000,000	一般事業費	24,101,900
セミナー会費収入	6,720,000	普通セミナー事業費	38,218,200
補助金等収入	7,175,000	学生指導セミナー事業費	8,413,800
寄付金等収入	180,000	国際学生セミナー事業費	3,603,300
雑収入	6,562,800	固定資産取得費	24,600,000
当期収入合計(A)	290,071,800	当期支出合計(C)	290,071,800
前期繰越収支差額	97,000,000	当期収支差額(A)-(C)	0
		次期繰越収支差額(B)-(C)	97,000,000
収入合計(B)	387,071,800	支出合計	387,071,800

平成8年度
第88回理事会・第68回評議員会

96年5月27日/アイビーホール

【出席者(順不同)】(理事)佐野博敏、岡宏子、中川秀恭、天城勲、小山五郎、宇野重昭、奥高孝康、(評議員)川原栄峰、井早康正、梶井功、有山正孝、太田次郎、野村東太、磯田浩、宮本美沙子、岡昭夫、天満美智子、絹川正吉、小倉芳彦

【委任状による者】理事14名、評議員63名

佐野理事長が議長となり、議事が進められた。岡専務理事から各議案について逐次提案説明があり、それぞれ質疑・審議の結果、いずれも原案通り承認された。

▽評議員人事に関する件

協力会員校の学長交替に伴う明治大学長戸

平成7年度一般会計収支計算書

(平成7年4月1日～平成8年3月31日)

(単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
基本財産運用収入	73,774	人件費	131,733,649
会員校会費収入	63,850,000	施設管理費	46,959,394
事業収入	191,698,003	その他の管理費	23,223,251
施設改修協力金	8,637,150	一般事業費	21,534,757
セミナー会費収入	6,230,000	普通セミナー事業費	37,441,076
補助金等収入	7,175,000	学生指導セミナー事業費	8,762,221
寄付金等収入	848,400	国際学生セミナー事業費	3,274,126
雑収入	7,964,362	固定資産取得費	13,051,935
その他の収入	2,472,557	その他の支出	2,590,338
当期収入合計(A)	288,949,246	当期支出合計(C)	288,570,747
前期繰越収支差額	103,039,086	当期収支差額(A)-(C)	378,499
		次期繰越収支差額(B)-(C)	103,417,585
収入合計(B)	391,988,332	支出合計	391,988,332

沢充則、法政大学総長清成忠男、明星大学長田中誠之、東京工芸大学長本多健一、桜美林大学長佐藤東洋士各氏の評議員就任と、右記大学前学長の岡野加穂留、下森定、児玉伸雄、田中栄、大野一男各氏の評議員退任。協力会員校加盟に伴う東京工科大学長高橋茂氏の評議員就任と、協力会員校脱退に伴う杉野女子大学長岩沢英一氏の評議員退任。逝去に伴う慶応義塾大学名誉教授佐藤朔、三菱総合研究所相談役中島正樹氏の退任。諸般の理由による上智大学教授川田侃、元上智大学教授鈴木皇、東京大学名誉教授加藤一郎、国際文化会館理事長永井道雄、元日本学術会議会長伏見康治、前産能大学長松田武彦、ソニー最高相談役井深大、三菱商事相談役田部文一郎、三越相談役市原見各氏の退任。任期満了に伴う学識経験者14名、会員校代表56名、財界関係者10名の評議員再任。

▽役員人事に関する件

協力会員校の学長交替に伴う法政大学総長清成忠男氏の理事就任と前総長下森定氏の理事退任。元上智大学教授鈴木皇氏の理事・常務理事退任。国際基督教大学長絹川正吉氏の理事・常務理事就任。東京外国語大学長中嶋嶺雄氏の理事再任と常務理事就任。任期満了に伴う理事長佐野博敏、館長・専務理事岡宏子両氏、常務理事有馬朗人、三宅彰、小山宙丸、宇野重昭各氏、理事中川秀恭、天城勲、塚田理、小山五郎、岡野加徳留、斉藤英四郎、村山松雄、吉川弘之、阿部謙也、山住正己、鳥居泰彦、木村孟、奥島孝康各氏、監事梶井功、外間寛両氏の再任。

▽協力会員校の脱退に関する件

杉野女子大学の協力会員校脱退。
▽平成7年度事業報告案及び決算報告案に関する件

特徴的な事項のうち主なものは次の通りである。①宿泊利用者は五万二、八七〇人で、対前年度比では六八、三六八（一一％）の減である。学生の利用は前年度と大差はないが、企業・社会人団体は深刻な不況を反映して三四％減っている。宿舍の稼働率は四八・二％であった。一方、前年度に続いて受け入れたマレーシア政府派遣留学生は、76名が3ヵ月滞在中に延べ六〇四七人に達した。②開館以来30年を経過し、施設・設備全般の老朽化が進行するなか、その整備・補修等に二千万円以上の費用を要したが、それでも最低の安全を確保するにとどまり、肢体の不自由な利用者を配慮しての諸改善には及ばなかった。③セミナー事業では、大学教員研修プログラムが盛況を続けている一方で、このところ大学共同セミナーなど学生プログラムへの参加が低迷気味である。このことは近年学生の意識が変わりつつあることの反映とも見られ、その対策を検討している。

平成7年度
第3回常務理事会

96年3月16日／大学セミナー・ハウス

【出席者】（常務理事）三宅彰、小山宙丸、宇野重昭、（法人）佐野博敏理事長、岡宏子館長・専務理事
●主な議題

評議員・役員人事、協力会員校の加入・脱退、平成8年度事業計画案・収支予算案、就業規則等の諸規程、施設の現状と再建計画、他。

平成8年度
第1回常務理事会

96年5月27日／アイビーホール

【出席者】（常務理事）小山宙丸、（法人）佐野博敏理事長、岡宏子館長・専務理事
●主な議題

評議員・役員人事、平成7年度事業報告案・決算報告案など第88回理事会・第68回評議員会の議案の確認。

平成7年度
大学教員研修プログラム委員会

第6回 96年1月16日／アイビーホール

【出席者】絹川正吉、中田良平、山内正平、佐々木一也、建部正義、原一雄、福田一郎、宮腰賢、蛭山道雄、小林志郎
【ハウス側】岡宏子館長ほか企画室スタッフ2名
●主な議事

第11回大学教員研修プログラムの募集結果、第11回大学教員研修プログラムの運営、他。

第7回 96年2月10日／アイビーホール

【出席者】絹川正吉、中田良平、山内正平、井上理、佐々木一也、建部正義、原一雄、福田一郎、宮腰賢

平成7年度
共同セミナー委員会

第3回（正副） 96年2月28日

【出席者】野崎昭弘、桜井哲夫、宇波彰
【ハウス側】岡宏子館長ほか企画室スタッフ2名
●主な議事

平成7年度大学改革推進等経費の経過報告、平成8年度大学改革推進等経費の担当校、平成8年度大学教員研修プログラムの実施報告、第11回大学教員研修プログラムの企画、第12回大学教員研修プログラムの企画、他。

平成7年度
第1回国際プログラム委員会

96年2月20日／フオッセ

【出席者】宇佐美滋、滝田賢治
【ハウス側】岡宏子館長ほか企画室スタッフ2名
●主な議事

平成7年度大学改革推進等経費の実施報告、平成8年度大学改革推進等経費、第12回大学教員研修プログラムの企画、他。

平成8年度
第1回大学教員懇談会企画委員会

96年5月10日／アイビーホール

【出席者】高倉翔、平野健一郎、中西又三、秋葉裕一、今村植夫、梶谷誠、吉川政夫、秀島武敏、松山正男、新井明、亀嶋庸一、北原和夫、田邊和子、中島義博、並河一道、西川孝夫、藤本義幸、安田忠郎、山本和、山本真一
【ハウス側】岡宏子館長ほか企画室スタッフ3名
●主な議事

委員長及び副委員長の選出、第32回大学教員懇談会の実施報告、第32回大学教員懇談会の報告書の編集経過、大学教員懇談会記録書編纂委員会の解散、第33回大学教員懇談会の企画、他。

平成8年度
大学教員懇談会企画委員

（就任順、○印は新任、敬称略）

委員長
平野健一郎
東京大学教養学部教授（国際関係論）
（副委員長）
中西又三
中央大学法学部教授（行政法）

秀島武敏 千葉大学理学部助教授(化学)
委員)

高倉 翔

明海大学外国語学部教授(教育行政学)
秋葉裕一

早稲田大学理工学部教授(独文学)
今村楠夫

東京女子大学文学部教授(米文学)
梶谷 誠

電気通信大学電気通信学部教授(ロボット工学)
吉川政夫

東海大学体育学部教授(体育心理学)
松山正男

神奈川大学外国語学部教授(英文学)
新井 明

日本女子大学文学部教授(イギリス文学)
亀嶋庸一

成蹊大学法学部教授(現代政治理論)
北原和夫

東京工業大学理学部教授(理論物理学)
田邊和子

大妻女子大学社会情報学部教授(原子核理論物理学)
中島義博

東京経済大学秘書課事務局長
並河一 道

東京学芸大学教育学部教授(X線物理学)
西川孝夫

東京都立大学工学部教授(建築学・耐震工学)
藤本義幸

中央大学学長室副部長
安田忠郎

武蔵工業大学工学部教授(教育学)
山本 和

国際基督教大学教養学部教授(国際金融・国際経済論)
山本真一

筑波大学教育センター教授(高等教育システム論)

平成8年度
第1回国際プログラム委員会
96年5月20日/アイビーホール
【出席者】宇佐美滋、佐藤英夫、天見慧、上坂昇、滝田賢治、納屋政嗣、志村尚子、関場誓

子
【ハウス側】岡宏子館長ほか企画室スタッフ3名
●主な議事
委員長の委嘱及び副委員長の指名、第22回国際学生セミナーの実施報告、第22回国際学生セミナーの報告書の編集経過、第23回国際学生セミナーの企画、他。

平成8年度
国際プログラム委員
(就任順、○印は新任、敬称略)

宇佐美滋
日本大学国際関係学部教授(国際関係論)
(副委員長)
佐藤英夫
筑波大学社会学系教授(国際政治経済)
滝田賢治
中央大学法学部教授(米外交・国際政治史)
委員)

天見 慧
青山学院大学国際政治経済学部教授(現代中国論)
上坂 昇
桜美林大学国際学部教授(アメリカ研究)
関根政美
慶応義塾大学法学部教授(現代オーストラリア論)
納家政嗣
上智大学国際関係研究所教授(国際政治学)

○大芝 亮
一橋大学法学部教授(国際関係論・国際機構論)
勝俣 誠
明治学院大学国際学部教授(アフリカ地域研究)
志村尚子
津田塾大学文学部教授(国際機構論)
関場誓子
聖心女子大学文学部教授(国際政治論)

○山影 進
東京大学総合文化研究科教授(国際関係論)

平成8年度
第1回共同セミナー委員会
96年5月24日/アイビーホール

【出席者】野崎昭弘、宇波彰、佐伯胖、伊藤正直、長谷川真理子、小松弘、宮島喬、吉見俊哉

【ハウス側】岡宏子館長ほか企画室スタッフ3名
●主な議事
委員長の選出及び副委員長の指名、第15回大学院共同セミナー「ゲーム理論の新しい展開」、第17回大学院共同セミナー「ハリウッド帝国の世界像―イメージ・ポリテイクス(案)」、第17回大学院共同セミナー「絶滅論(案)」の準備状況、平成9年度共同セミナーの企画、他。

平成8年度
共同セミナー委員
(就任順、○印は新任、敬称略)

委員)長
宇波 彰
明治学院大学文学部教授(哲学・記号論)
(副委員長)
伊藤正直
東京大学経済学部教授(日本経済論・金融論)
長谷川真理子
専修大学法学部教授(行動生態学)

委員)
野崎昭弘
大妻女子大学社会情報学部教授(情報科学)
伊東孝之
早稲田大学政経学部教授(比較政治学)
江原由美子
東京都立大学人文学部助教授(社会学・女性論)
佐伯 胖
東京大学教育学部教授(教育方法学)
松井孝典
東京大学理学部助教授(比較惑星学)

小森陽一
東京大学教養学部助教授(日本近代文学)
井上信子
日本女子大学人間社会学部講師(臨床心理学)
小松 弘
埼玉大学教養学部助教授(映像理論)
宮島 喬
立教大学社会学部教授(社会学)
村上陽一郎
国際基督教大学教養学部教授(科学史)
山中速人
東京経済大学コミュニケーション学部教授(社会学)
吉見俊哉
東京大学社会情報研究所助教授(文化社会学)

千人会

95年12月~96年5月

◆ご入会ありがとうございました
海老沢信一殿

- 山梨学院大学広報室主任/C
 - 白井克彦殿・早稲田大学教授/A
 - 高木実殿・東京医科歯科大学教授/C
 - 上田和宏殿・芝浦工業大学教授/B
 - 吉田豊殿・セミナー・ハウス職員/B
- ▼会員数11、四三六名

◆会費ありがとうございました

- 八戸信昭、山下幸夫、八杉貞雄、小林淑郎、梶木隆一、水野伝一、田村光三、近藤保、赤木愛和、矢澤修次郎、戸田三三冬、隈部直光、福井憲彦、笠井貴征、小松八郎、増田義男、松元文子、栗田寛、今井哲哉、久場嬉子、正路徹也、新城信枝、五十嵐香、橋谷卓成、有山正孝、尾田幸雄、松尾章一、茂木誠陸、竹内啓一、示村悦二郎、大須賀節雄、岡

平成7年度千人会会計収支計算書
(平成7年4月1日～平成8年3月31日) (単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
会費収入	3,595,000	印刷製本費	44,084
雑収入	145,059	通信運送料	269,915
		通込手	40,551
		雑	6,180
当期収入合計(A)	3,740,059	当期支出合計(C)	360,730
前期繰越収支差額	16,343,622	当期収支差額(A)-(C)	3,379,329
収入合計(B)	20,083,681	次期繰越収支差額(B)-(C)	19,722,951

惺治、徳重昌志、木下是雄、生山智己、横山実、慶伊富長、村上健、麓信義、城謙輔、市川孝正、半谷高久、早弓博、鈴木成文、篠沢公平、伊藤修、大谷禎之介、竹村憲郎、坂田長生、川鍋正敏、麻生幸、高野雄一、木村宗男、小川捷之、杉山吉茂、川崎智永、池田温、大塩俊介、茂木利一、外池孝雄、塚家宏太郎、折田政博、濱川祥枝、江村裕文、来住正三、井上信子、森久、岡崎正、横沼健雄、三浦安子、平松幸一、清水誠、有馬弥子、杉山好、楠吉彦、澤孝一郎、池田貞雄、山本よしゑ、平木典子、小西正捷、竹林代嘉、金台然、佐藤進、後藤聰一、古田勝久、新井克巳、青柳総太郎、山田圭一、合田信子、鈴木皇、末永國明、齊藤耕二、石坂巖、飛田茂雄、田中國昭、師岡孝次、石井素介、鈴木博、江幡玲子、立川明、高橋恒郎、上山碩、高木実、白井克彦、小林善彦、横山宏、三浦永光、大川信明、松本幸一、小山弘志、田原勘意、一番ヶ瀬康子、萩原玉味、齊藤重夫、佐藤共子、渡辺恭章、上田明子、塚本利明、松澤正夫、吉田光孝、本谷勲、川端香男里、川崎正三、田島信元、石田孝夫、慶谷壽信、

新保清子、山本襄治、武田昌輔、若山邦紘、司馬正次、山内正平、伊藤学、乾崇夫、中島力、池井優、猪瀬博、近藤晃、志島學修、富沢賢治、大森東亜、高村新一、新井明、石川道夫、高橋昭三、越智昇、小林哲也、佐々木良一、小川洋輔、茅野良男、谷口修、西川大二郎、上谷琢之、牧野誠一、寺東寛治、山住正己、清水畏三、鐘ヶ江信光、鎮目和夫、小俣武夫、石井正博、小川政亮、遠藤平治、山口俊夫、清水啓三郎、中富光國、松山正男、本田和子、金子ハルオ、手塚千鶴子、渡辺忠胤、飯田芳男、中村孝之、小林一彦、小野寺嘉孝、根岸愛子、松田安弘、山本實、風間邦光、亀岡篤、浮田久子、蓮見音彦、建部正義、山田辰雄、北村嘉行、板垣雄三、石堂常世、川喜田愛郎、谷實信、高橋和之、北原文雄、藤井良治、佐藤百世、原田敬一、磯直道、吉川孔敏、今井清一、野澤英、井原恵治、彦由一太、増澤利幸、柘植敏治、村井実、安藤英治、磯田浩、東洋、熊澤義宣、斎藤眞、鈴木陽子、西村閑也、河田喬夫、佐野博敏、永野賢、一松信、絹川正吉、寺中良二、中村妙子、宮腰賢、島美喜子、柳澤富雄、森昭彦、佐藤毅、望月清司、中村修、中岡二郎、中田良平、竹村五夫、勝見允行、森山ヨシ子、笠耐、福島重美、土井恵美子、箱木眞澄、西川恭治、中津竹子、斎藤幸一郎、大西清、市川邦彦、村田晴夫、小原啓義、麻島昭一、油井大三郎、馬越徹、泉敏彦、広内哲夫、牧内勝、菊地昌典、原一雄、島田治夫、大山乃富子、高橋たまき、三神勲、人見宏、平澤薫、秋間実、福永壽巳夫、吉田宏哲、白川和雄、山口桂子、岡村総吾、本間仁、萩原稔、有賀弘、高松正昭、小倉芳彦、梶原豊、吉沢四郎、高瀬文志郎、寺内礼、福田一郎、丸山眞男、遠藤卓郎、佐藤公孝、河村フジ子、関口富左、尾田綾子、柴田泰比古、茂木光子、加藤六美、春田素夫、中島康孝、手塚喬介、佐藤玉枝、熊田陽一郎、鈴木三男吉、西野萬里、内山正熊、木田宏、木村

おたより

建一、福西基、大田末穂、原豊、藤木宏幸、池原義郎、大河内正陽、室本誠二、松澤通生、村山松雄、石弘光、深山和子、豊田陽子、富塚文太郎、小松雄二、佐藤慶幸、関根隆光、久保田浩、堤彪、佐藤和男、矢野洋四朗、徳川陽子、染谷恭次郎、安藤賢一、藤井弥太郎、井上繁、高峯一愚、村田勝彦、林肇、海老根宏、大友浩、池田義人、土井二郎、田中喜久昭、高木健太郎、仁科雄一郎、佐伯彰一、阿部弘、桐生富久、堀野定雄、百瀬宏、清水昭次、向山文雄、太田正孝、横山勝信、江淵浩美、井上宇市、國分久子、山下肇、富山芳正、水野弘文、北野弘久、比留間敦子、栗原尚子、柏原啓一、下森定、正田亘、吉利喜美、大原栄一、伊倉退蔵、加藤晴久、後藤捨男、岡田英和、芳賀徹、狩野紀昭、小林保彦、伊藤意智郎、奥野忠一、荒井献、舛淵照範、小原清成、滝口俊子、今井栄、水谷眞智子、澤島侑子、峰岸純夫、長谷川幸男、天城勲、楡田信男、高柳暁、山本幹夫、大村晴雄、中川作一、柳下登、椿弘次、内田市五郎、芳野隆夫、相澤史一、渡利千波、徳末愛子、佐藤隆二、徳永勇雄、福島明、奥山典生、三浦徳弘、西勝、朝野洋一、西澤宗英、高橋忠次郎、荒川有史、本明寛(敬称略)

●戦後50年たちましても沖縄は戦前の臨戦態制をひきずっています。日本が民主主義国家として名実ともに存在するため、いまの問題がステップストーンになるように折っています。(沖縄天久神の教会・折田政博)

●毎年四月に、明治大学と川口短期大学の両ゼミナール合同で有意義な合宿をさせていただいております。卒業生にとっては豊かな緑の中での二泊三日が思い出深いものとなっております。

いるようです。(明治大学教授・森久)
●小生一月に古稀を迎えましたが、今回は特別にA会員とさせていただきます。学生とともに起居したゼミナールハウス、散策した野猿峠のことがなつかしく思い出されます。(自治省地方財政審議会会長・佐藤進)
●44年ぶりに冬のニューヨークを訪ねました。ブロードウェイでの観劇を楽しみ、リバーサイドパークの落葉をふみしめ、ハドソン川の静かな流れをながめては、時の流れを噛みしめました。ゼミナールハウスのますますのご発展をお祈りいたします。(文教大学教授・末永國明)
●春にはフレッシュマンとお世話になります。米国の大学ではこの Freshman という言葉は使わないそうですから、名前も変えなくてはいいけないかとも考えはじめました。(津田塾大学教授・上田明子)
●私の住む群馬県の赤城山の南側では風華(晴天の日でも上越国境をこえて降る雪)が毎日舞っておりますが、最近では露のトウなどの山菜が採れはじめました。もうすぐ春になり、新入生を迎える季節になります。(武蔵工業大学教授・志島學修)
●大学ゼミナールハウスでのインターネットのホームページなり電子メールのアドレスなどあれば、今後の会員間の連絡などにも好都合かと思えます。(信州大学教授・松田安弘)
●今回法政大学を退職し、ケンブリッジ大学クレア・ホルルの客員フェローに任じられました。今後はずっと英国における予定ですので、勝手ながら千人会は退会させていただきます。勝手ながら千人会は退会させていただきます。お願いいたします。(西村閑也)
●大学ゼミナールハウスの存在の意味がますます鮮明になりつつあります。ハウスと歩みを共にできることを幸いに思います。(国際基督教大学教授・絹川正吉)
●今年年度は、都民カレッジで夏と冬に各九回おとなの受講生に「哲学」の話をしました。来学年も夏に出講しますが、新しく或る

●第10回大学教員研修プログラム「単位制度の空洞化に挑む」に寄せて

1.5時間1日5コマなら、 1科目3単位にすべきではないか

元学習院大学文学部教授 児玉 久雄 (千人会員)

一つは、卒業要求単位124単位の基礎です。私の理解では、これはアメリカの大学の卒業要求120ポイントに、日本の特殊事情として保健体育4単位を加えたものだと思います。問題は、アメリカの大学では週3時間1セメスターの1科目を3単位としているのに、日本の大学の専門科目などでは週2時間(と称して、実は1.5時間)通年(すなわち2セメスター)の1科目を4単位としている点です。

計算すると授業時間数では同じものがアメリカでは3単位、日本では4単位になります。これで卒業要求単位数を割ると、アメリカでは40科目、日本では31科目になります。これを幾分か調整する訳を果たしていたのが、演習・語学を2単位に数えるという取り決めでしたが、その後、演習の方に講義より少ない単位しか与えないのはおかしいという声が起こり(これも当然のことと思います)、演習にも講義と同じく4単位を与え得るように改定されました。これで日本の大学とアメリカの大学との授業量の格差はますます広がるはずでしたが、日本の多くの大学では、卒業要求総単位数を増やすことで解決してきたようです。

ところが最近の傾向は、これを124単位に止めようとする。本当は、1.5時間授業、1日5コマ制が日本の現状にあっているとするならば、アメリカ風に1科目3単位にするのが、単位の国際互換性という点から見ても、適当なのですが。

間違いのスタートは、新制大学制度発足時にさかのぼります。通年の講義が4単位、演習が2単位ということを開いたとき、当時旧制最後の大学生だった私は、友人となんて馬鹿な制度だろうとあざ笑った記憶があります。今考えてみると、日本の新制大学制度はこ

のときに失敗を運命づけられていたようです。小クラス制度の、教員の人件費のかかる演習の単位の方が、大クラスでも実施可能な講義よりも少ない単位ということが、経営効率からいっての講義と演習との格差を増大し、大講義中心の大学経営が有利という路線を確立してしまったからです。

極端な意見かもしれませんが、私は、日本の現状では、講義2単位(小クラス制などで特別な場合は4単位)、演習4単位(極小クラス制などで特別な場合は8単位)という逆転をさせるのがよいと思っています。学生の学習量という点からいっても、経営的に見て予算の多寡という点からいっても。なお履修者の側から实际的に考えると、あの分野では講義4つの代わりに演習を2つにして、がちり勉強したいという選択を考えるのは、自然かつ健全な、望ましい生き方ではないかと思っています。

1単位1単位の充実ということの重要性については、十分ご討議いただいたことと存じます。それに加えて単位というものが、①学生に要求する総学習量の標準化、②異種類の科目間の相互交換性の適正化と、それに伴う科目自由選択可能性の増大という面があることも、お考えになったこととは思いますが、意外に忘れられがちなことなので、何らかの機会に、今回のセミナーを担当してくださった方たちでお考え頂けると有り難いと存じます。

日本の新制大学制度は、①の点では、到達主義ではなくて付加価値主義を取り、②の点では、アメリカ式の大学講義が日本でも行なわれるという期待できそうもない前提で出発したようです。この制度の一つの利点は単位の国際性だったと思うのですが、それは今失われつつあります。

単位というものを真剣に取り上げていただいたこと、特に単位の経済価値的側面を取り上げていただいたことに、心から敬意を表します。今後とも大学についての地道な討論が続けられることを祈念致します。(岡館長宛の私信から)

大学で「倫理学」の通年の講義も二コマ受け持つことになりました。

(東京都立大学名誉教授・秋間美)

●恒例となった学生を連れての「ポルネオ島先住民を訪ねて」(二週間)からもどったところです。昨年の研修レポートを別便でお送りします。

(中央大学教授・寺内礼)

●世の中の速度が人間の思考速度、やさしさ速度よりもすべったく速いので、自然の中に息づく人間のテンポを取りもどしたい、取りもどして欲しいとささやきたい昨今です。

(国立音楽大学教授・佐藤公孝)

●国際化の進展で、大学の世界でもボーダーレスな交流が図られております。そのコミュニケーションの核として、セミナー・ハウスの存在性を高められますように願っております。

(日本大学教授・室本誠二)

寄贈図書

'95年12月〜'96年5月

『公務員行政研修のあり方』『政策研究と公務員教育』『政策課題と研修』『政策形成の課題と実際』『地方分権と自治体改革の課題』『行政改革を考える』『政策と公務員研修』

山梨学院大学 殿

『神谷美恵子』

江尻美穂子 殿

『学歴社会をぶっつぶせー大学の空洞化と教育の荒廃を生む学歴社会を撲滅せよ』尾形憲殿
『ベトナム現代短編集1』

大同生命国際文化基金 殿

『吉野作造の政治理論とキリスト教』

駿河台出版社 殿

『光から影へーフォト・ファンタジー』

橋本孝好 殿

『大辞泉』

住友銀行 殿

『これが建築なのだー大竹康市番外地講座』

齊藤祐子 殿

『数寄屋の実践ー番匠設計の30年』

小町和義 殿

『夏目漱石を江戸から読むー新しい女と古い男』

中央公論社 殿

『夏目漱石と女性ー愛させる理由ー叢刊・日本の文学15』

新典社 殿

『グーテンベルクの銀河系ー活字人間の形成』

みすず書房 殿

『声の文化と文字の文化』

藤原書店 殿

『S・D・S 9 集合』

新日本法規出版 殿

『社会的ジレンマのしくみー「自分1人ぐらいの心理」の招くもの』

「オデッセウスの鎖ー適応プログラムとしての感情」

サイエンス社 殿

『現代の経済理論』

東京大学出版会 殿

『動物生態学』

蒼樹書房 殿

『ジョン・スタインベック文学の研究』

『西洋法制史の研究』

『ジョージ・オーウェル』

学習院大学 殿

『小さいまち紀行ー南フランス』

『小さいまち紀行ースイス』

土田百合 殿

国際日本語普及協会 殿

寄付

'95年12月〜'96年5月

〈一般寄付金〉

一〇、〇〇〇円 II アイワテクニカルサービス 殿

五〇、〇〇〇円 II 中央大学教授 山下幸夫 殿

三〇、〇〇〇円 II 南武蔵地区ボーイスカウト隊

BSラーイー実行委員会 殿

三〇、〇〇〇円 II 福祉財団役員 村田一也 殿

三〇、〇〇〇円 II 相原典之・日比野幸紀美 殿

〈植樹〉

しだれ桜一株 II 生活協同組合コープとうきよ

う一九九六年度新入職員 殿

〈現物〉

写真(額入り)「桜花満開」 II 土田美芳 殿

業／務／通／信

'95年12月～'96年5月の合宿研修から

●ハウスとともに年輪を刻んで

年々歳々学生を連れて合宿をされた先生が、定年を迎え「これが最終合宿です」と言われる。長年の熱心なご利用に謝意を表し、本号ではその中のお二人を「利用状況」頁で紹介させていただきます。

東京神学大学の「教職セミナー」は今年で27年目。正月早々、全国各地からキリスト教会の担い手百名以上が参集し、卒業後のリカレント教育で熱気に満ちた二泊三日をすごす。「わたしたちの合宿（下掲）では、松永希久夫学長にハウスとともに歩いてこられた同セミナーをご紹介します。

●マレーシア留学生、二年目は76名に

今年も1月6日よりマレーシア政府派遣留学生が順に到着した。昨年を上回る計76名（うち女子15名）で、4月はじめまでの滞在は延べ六、〇四七人に達した。

同期間中、昨年同様、日本各地の国立立大学に「全員合格」を果たした（次頁に進学先一覧）。そして、3月29日には、当ハウスでの閉校式に続いて都心の竹橋会館で開かれた「大学合格祝いと激励会」（日本インドネシア科学技術フォーラム主催）に出席した。この席上でのワン・アハマド君のあいさつの全文を「私の国際交流」（次頁）に掲載した。

●春は連日のオリエンテーション合宿満開の桜から新緑へと移り変わる4・

5月、この丘は今年も大勢の新入生たちで溢れた。両月中に実施されたオリエンテーション合宿は計56グループ（31校）であった（20頁に「実施状況」一覧）。今春のうれしいニュースは、ハウス近隣の東京工科大学が本年度協力会員校の仲間入りをし、早速全四学科（計744名）が次々と来泊されたこと。また、長年の

わたしたちの合宿

教職セミナー四半世紀

—大学セミナー・ハウスの精神と表裏一体となつて—

東京神学大学学長 松永希久夫

東京近郊で最も夕陽が美しいとされる野猿峠で、正月の第二週に全国各地に散らばっている卒業生を集めて継続教育の一環として「教職セミナー」を始めて二十七年になる。最初は大学キャンパスで行なわれたが第2回か3回からは大学セミナー・ハウスで三泊四日乃至二泊三日で行なわれている。狸や栗鼠が走り回り様々な小鳥たちの鳴き声に囲まれて過ごした初期は、山小屋風のキャビンしかな



岡館長との『エールの交換』であいさつする松永学長（'96.1.10／交友館）

利用実績を誇る東京都立立川短期大学と同商科短期大学が、本年度統合されたため、両校は東京都立短期大学の新名称でそれぞれの合宿を続けてくださった。十文字学園女子短期大学生活学専攻が新入生と2年生の「交歓会」を始めたのは10年前。かつてハウスの設計者故吉阪隆正先生に導かれたと同じ新入生体験

く、星空の夜はまだしも雨風の暗夜手洗いに行くのに難渋したものである。最近施設も近代化した。

ちょうど学園紛争の時期あたりから社会も変わり大学教育の場も変化しつつある時に、一年に一回ではあるが研究者・教育者と大学を出て現場の実践経験に採られた卒業生とが、普遍的な基礎学と臨床的な応用問題とを突き合わせ、擦り合せる適切な機会として開始され、良い伝統を造りつつある。教育と現場とのフィード・インとフィード・バックの血の通った大切なパイプと言っても良い。

内容としてはキリスト教あるいはこれを取り巻く世界について、毎年、重要かつ緊急な課題が取り上げられ神学講演・講義とセミナーが行なわれる。また教職者の教養として芸術、哲学思想、国際関係、諸宗教、政治や社会の問題等につき種々な講師を招いて特別講演が準備されている。近年は主題講演と同主題による教授全員参加の三つのシンポジウムを中心にセミナーがなされて熱気を呼び、百名以上の参加者を得て盛況である。

27回のセミナーを重ねて、キリスト教と日本の精神的風土との関係が繰り返し主題となっているの気が付かされる。それはベツレヘム、ナザレから始まりローマ、地中海世界に拡がり、ゲルマン、ゴート、スラブの地に至り、現在に至るまで二千年の間どこへ行くでも経験してきた事柄であるが、やがて日本における新しい文化形成力として創造的に関わる日を迎えるための産みの苦しみである

を、いま学生たちにも、というハウス第二世代の藤井敏信教授の思いが契機となった。だから、ここでの「生活学」合宿の基調にはいつも「人と建築と自然が一体となった空間」としての大学セミナー・ハウスがある。同教授から一文をお寄せいただいた（19頁）「わたしたちの合宿」。

う。キリスト教が日本人の心の故郷と見なされるまでには、これからさらに千年二千年の年輪が必要とされるかもしれない。

他に在学生の修養会も公開夜間講座の夏期集会にも、このところ毎年、利用させて頂いている。

教職セミナーの折りには、二泊三日の中日にハウス館長招待のお茶の会が開かれるのも最初から今に至るまで続けられ感謝している。重厚なプログラムの中で、ひとときの清涼剤のごとき休息となっている。恒例になった館長の歓迎の辞と学長の答辞が「エールの交換」と呼ばれるようになって久しい。飯田宗一郎、中川秀恭、岡宏子と三代の館長のウイットとエスプリの効いたスピーチが佐藤敏夫、竹森満佐一、大木英夫、左近淑等、歴代学長のそれぞれ個性あるレスポンスを惹起して座を賑わすのである。

近世近代と西欧キリスト教文化を中心とした時代は爛熟し崩壊しつつある。二一世紀からは第三世界を包含した地球共同体の時代が始まろうとして胎動しているが、地球絶滅の危機も予感され、未知ゆえの不安に満ちた世紀末現象が続発している。真理に打ち砕かれし謙遜な知性の饗宴、大学共同体の相互協力また総合の場を提供するのが創立者以来年々の夢であり、Plain Living, High Thinkingを標榜する大学セミナー・ハウスこそ、未来への希求と展望が生まれる源泉たりえるはずなのである。

マレーシアの将来は私達の責任

—二年連続の全員合格を果たして—

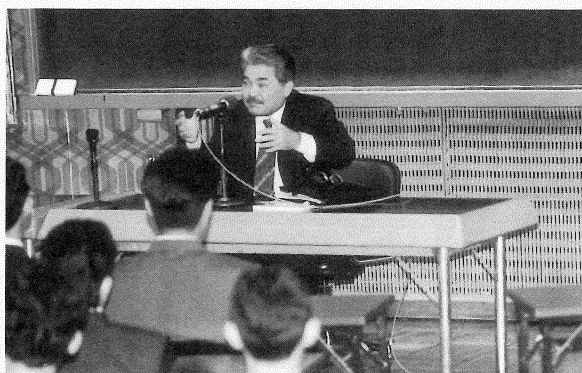
マレーシア政府派遣留学生 ワン・アハマド
(名古屋工業大学機械工学科入学)

皆様こんにちは。本日は私達のためにこのような盛大なお祝いの会を開いていただき、まことにありがとうございます。

さて、私達は日本留学予備教育センターつまりJMCの二期生として約二年間、日本語や理数の勉強をしてきました。勉強は楽しか



「大学合格祝いと激励会」の席上、学生代表としてあいさつするワン・アハマド君(右から2人目)(96.3.29/竹橋会館)



「開校式」で学生たちを激励するダト・カティブ駐日マレーシア大使(96.1.23/講堂)

ったですが、日本へ留学するのは思ったほど易しいことではありませんでした。日本へ留学するためにまず昨年一二月にマレーシアで日本語能力試験一級と私費留学生統一試験を受けました。

さらに、私達は政府派遣留学生といっても、他の政府プログラムと違って、日本で大学の入学試験を受けなければなりません。そこで、私達は一月に四つのグループに分かれて日本に来て、大学セミナー・ハウスで入学試験の準備を始めました。日本の冬の中、大変でしたが、入学試験を受ければ自分の実力がどのくらいかわかるし、合格すればうれしさも大きかったです。

ところで、この三カ月の間、大学セミナー・ハウスでは勉強以外にも色々新しい事を学びました。初めて雪を見たのは本当に楽しかったです。地震も初めてでした。小さい地震でよかったです。日本の生活とか習慣とかにもだんだん慣れてきました。日本の食べ

のも食べられ、日本人の普通の会話もできるようになってきました。

大学の入学試験が終わってからもいろいろな催しがありました。今月(一九九六年三月)の二二日には東京デイズニールランドへ行きました。そして、二三日と二四日には日本の家へ行き一泊ホームステイをしました。ホームステイでは日本人の生活を実際に体験できました。この体験は私達の心につつまでも残ることでしょう。

こうした中で、私達の受けた入学試験の結果が次々に発表され、喜んだり、残念がったりもしましたが、おかげ様で私達全員が日本の大学に入りました。四月からはよいよ大学生です。大学生になれば勉強はもっと大変になります。私達は挑戦を続けていきます。

挑戦といえば、マレーシアのマハティール首相はマレーシアを二〇二〇年までに先進国の仲間に入れるという「ビジョン二〇二〇」を発表しました。このビジョン二〇二〇もそんなに簡単なことではありません。そして、二〇二〇年は今のマレーシアの大臣の時代ではなく、私達の時代です。だから現代のマレーシアの若者は、私達も含めて、どこ



成人式、節分、そしてお点前などを体験して(96.3.16/遠來荘)

今から私達はそれぞれの大学に入りますが、日本の学生や他の国の学生に負けないように勉強するつもりです。そして、私達の後輩のためにも、JMC出身の学生はいいぞと皆様に言ってもらえるようになりたいと思っています。

以上、長くなりましたが、私達の抱負を述べて私のあいさつといたします。いろいろお世話になり本当にありがとうございます。

マレーシア留学生の進学先

国立大学	人数	
	男子	女子
愛媛大学	3	
大阪大学		1(1)
岡山大学		1
鹿児島大学	1	
九州大学	1	2(1)
九州工業大学	2	
京都工芸繊維大学		1
熊本大学	1(1)	
群馬大学	2(1)	
神戸大学	1(1)	
佐賀大学	2	
電気通信大学		1
東京工業大学	6(4)	
東京大学	1	
徳島大学	1	1
鳥取大学		1
富山大学	2(1)	
長岡技術科学大学	1	
名古屋工業大学	1	
福井大学	1	
三重大学	1	
宮崎大学	1	
山形大学	1	
山口大学	3	
山梨大学	1(1)	
合計	33(9)	8(2)
	41(11)	
私立大学		
岡山理科大学	1	
近畿大学	3	
慶応義塾大学	1	
芝浦工業大学	3	2
拓殖大学	2	2
東海大学	4	1
東京工科大学	1	
東京電機大学	2	
東京理科大学	1	1
武蔵工業大学	2	
明治大学	4	
立命館大学	3	1
早稲田大学	1	
合計	28	7
	35	

注。()は文部省推薦による入学者で内数

新入生合宿に思う

●通っている大学も住んでいる家も、緑に恵まれていると思っていた。けれど、セミナー・ハウスはより豊かな緑に囲まれていて、驚いた。緑豊かな所では、小鳥の声も響き渡って、心がゆったりと安まる。その中で、英会話は、普段の授業と違って伸び伸びと出来たように思う。都会のビル風でなく、ほんとうの「風」を感じながら学ぶ英語は、普段よりもすんなりと体に染み込んだ。もう一度、あの自然の中で英語を学びたく思っている。

(文教大学女子短期大学部・針金れい子) ●私がこのセミナーに参加して良かったと思うこと、それはたくさんの人を知りあえたことである。私はかなり人見知りをするほうである。しかしこんな私でもいろんな人と話をする事ができた。これはひとえにセミナー・ハウスの環境がそうさせたのだらう。森に囲まれた静かな風景は、緊張をほぐし、自然な状態にさせてくれる。最後に出会いを作ってくれたこの大学セミナー・ハウスに感謝を表したい。

(東海大学西洋史学科・遠藤敬) ●大学生生活の最初にこのような機会を与えられ、まだよく知らない人の考えに触れることができたのはとても有意義だったと思います。特に討論会では、外見からは解らない、一人一人の心の中を垣間見た気がします。人の意見を聞くことにより、自分の考えの及ばなかった点にも気づき、もっと新しい考えを見出すとともに、新たな問題も生まれてきました。四年間を通して、もっと多くのことを考え、成長していきたいと思っています。

(日本女子大学教育学科・松沢杏)

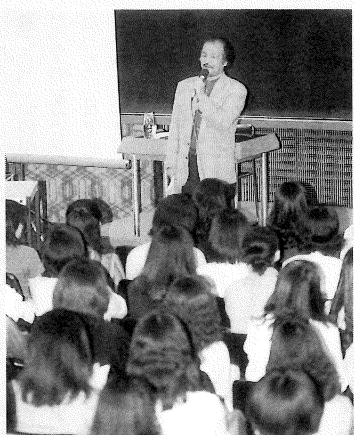
わたしたちの合宿

思い出深い新緑の中での交歓会

人と建築と自然が一体となつて——
十文字学園女子短期大学教授 藤井敏信

もうすでに十年余になるが、大学セミナー・ハウスでの交歓会のために毎年四月下旬の美しい季節にこのヤマを登ってきている。そしてこの環境に身を置く度に新たな発見をしている。均質化が進む世界の中で、出来事と空間が一体となった共生環境が再び見直されてきているように感じるのは私だけではないと思う。

当生活学専攻にとつて、恒例となつた交歓会は、学生、教員が全体でまとまつて行なう唯一の集いである。昼過ぎに入り、一泊してあくる日の昼頃にヤマを下る。新入生の歓迎



新入生歓迎・交歓会の開会式——ハウスでの合宿の趣旨を説明する藤井敏信教授（'96.4.25／講演）

と相互の交歓が主な目的であり、教員にとつては毎年のお祭りのようにその日を迎えるのが常になっている。

卒業を間近にした学生が、ヤマの環境に浸った「楽しかった出会い」について語る様子や、あるいは時折研究室へ訪れる卒業生が「最も印象的な出来事」のひとつに挙げることから、個々に特別な思い出となっている者も多いのではと推察する。

この「集い」は果たしてどのように学生に受け取られてきたのだろうか、と改めて考えてみた。例年行事内容に大きな変化はない。一日目は午後の記念講演、夕食、夜の歓迎会、コース別の集い、そして就寝(？)。二日目は朝食に始まり、午前のグループ別ミーティング、再び講堂に集合して報告、総括、そして解散と、ワンセットの筋書きが既にできている。学生諸君と教員はヤマの中を、各自集まる場所を求めて歩き回る。

それでもこの十年の間には、いろいろな思い出がヤマに埋め込まれてきた。お招きする講師の方々が提供する話題は、生活学に関連するものであればよしとしたので、女性問題からデザイン論まで幅広く、それぞれに新鮮で刺激的であった。が、やはり一年のお祭りである方が印象に残っている。交歓会が一泊行事となつて、いくつかの候補地からセミナー・ハウスを選択し、ここでの開催を当分継続しようとなつた当初の頃だった。学生が企画した夜の歓迎

会で、講堂がデイスコ風に変貌した時には、思わず亡き師吉阪に手を合わせた。いろいろハプニングもあったが、学生の王国はいつも懐深く迎えてくれた(私の学生時代もそうだった)。夜も更けてから始まった中央セミナー館での手作りライブは、閉ざされた空間が演奏に一体感を与え、時の流れを忘れさせてくれた。また谷間の野外ステージでのマンドリン演奏には、朝の樹木も聴きこえているかのような静かな充実感が満ちていた。

新緑の季節はそれだけで心が浮き立つ。ほぼ二百数十名という人数は全山を占拠する勢いであり、食事時行き交う学生が緑の木立の間から見えかくれる有りさまは、ポツティチェルリの「春」を思い起こさせるし、若々しい緑に埋没しそうな傘状の講堂から風のようにもれてくる講話の断片は、賢治の世界のようにヤマが今にも動き出しそうな生気を運んでくる。地形を取り込み、人と建築と自然の一体となつた場がそこにある。斜面を縫う小道は迷路とは異なり、必ずどこかへ導いてくれるムラの道だ。小コスモスがそこにある。

下りる学生を見送つた後、腰掛けてじっと身を置いていると、いつもの事だが二十年も前に吉阪先生に導かれてゼミに参加していた頃の気分が重なってくる。講堂の陰から背筋をのびしたヒゲが現れ、「どうですか? いま何かやっていますか?」と語りかけてくる。「……」は私。快い疲れと、洗われた気持ちで静けさを取り戻したヤマを下りる。

●セミナー行事で強烈な印象を持ったのは、夜、先生方、先輩方を混じえてのデイスカッションでした。二部であることから、会場に集まった学生の年齢層は幅広く、会話も弾み、特に村上先生を中心に場は終始和やかなムードだった。デイスカッションのテーマは「自分のこれからは何か」。様々な意見が出さ

れたが、それは私にはまだ確立されていません。私は、これからの3年間でその答えを見つけないと思っています。

(東京都立短期大学経営情報学科II部・石川晃子) ●仲間と共に一つのものをつくりあげる素晴らしさ。このことに改めて気付かされた合宿でした。レク係だった私は、キャンプファイ

ヤーとスポーツ大会が成功するかどうかという心配でいっぱいでしたが、実際やってみると皆楽しく踊ったり歌ったりして、本当に良いものになりました。豊かな自然の中でお互いを良く知ることができ、今後の学校生活が楽しみにになりました。

(白梅学園短期大学保育学科・田辺敦子)



ハウスの丘を探索するオリエンテーリングを前に集合する東京工科大学情報工学科の新入生たち（'96.5.21／本館前広場）

●友達を増やそう。そう思った二日間。短い時間でしたが充実していました。ディスカッションや雑談などで友達も増え、人の意見を聞き、何より意見を発表することで社会福祉に対する想いも強まった。入学したばかりの時期、一人でも友達が増えたことは私にとって大切なこと。その機会をくれたこの行事は素晴らしいものでした。これから四年間、皆と仲良く勉強したり遊んだりしましょうね。

（日本女子大学社会福祉学科・松田陽子）
●果たしてうまくやっていけるのだろうか。入学当時のそんな不安を、セミナー・ハウスの生活は吹き飛ばしてくれた。都市生活に慣れてしまった私を、自然の中での集団生活へ導き入れ、うまく他人とコミュニケーションを取る場を与えてくれた。友達もたくさんできたし、久しぶりにいろいろな人と話をした気がする。大学生活を送る上で、このセミナー・ハウスは友人という大事な基盤を作ってくれたようだ。

（東京工芸大学建築学科・鈴木貴子）
●私は一泊二日という短い期間ではありましたが、セミナー・ハウスで私の普段の生活とはかけ離れた時間を過ごしました。テレビなどの電化製品はほとんどなく最初にハウスに入った時は、もの寂しく思いました。でも皆と寝食を共にする喜びはセミナーでしか味わえないものだと思えてから実感しました。食事はとてもおいしくいただけ、夜も割とよく眠れました。一度あの様な良い意味で質素

な生活を経験するのも良いと思います。

（恵泉女学園大学英米文化学科・渡邊加奈子）
●私にとってこの合宿は、大学生活になって初めてのものです。「初めて」と言うものほどなに意味深いものなのでしょう。韓国から来てまだ一ヶ月しかたっていないから私はこの合宿で長年つきあったような、心をうちあけられる友だちに出会えました。自然の中でお互いをすなおにうちあけ、二日を一緒に過ごし、心の中で何かが結ばれ帰って来ました。今の友だちがその時出会った人たちです。たった二日でしたが私にとっては何年かを過ごしたような、とても大切な時間でした。

（慶応義塾大学文学部・李韓羅）
●新しい自分の発見、それができたのが、フレッシュマンセミナーの二日間である。この二日間、僕は多くの人と会話をもち普段はできないような会話をしむことができた。ここでは、先生方や友達とのいろいろな考えを、わずかながら自分に吸収し、それを更に

自分の考えを広げ、新たな目標を作ることができた。僕はこのセミナーにとっても感謝している。それは、良い時間を過ごせただけでなく、自分を再発見できたからだ。

（東京工科大学機械制御工学科・寺内祐二）
●入学して、まだ学校にも慣れてなく、わからないことだらけの私達にとって、この合宿は、先輩たちいろいろな教えてもらったり、多くの友達をつくるのに、とても良い機会だった。大学セミナー・ハウスに着いて、まず最初に驚いたのは、大変「緑」が多く、「あまり見たことのない建物」だった。そして、「大学セミナー・ハウスの空間とデザイン」の講義で、それぞれの建物の説明を受けた後、再び見直してみると、カーブを使ったやわらかいモチーフでできた建物は、この自然にとても合っていることに気づいた。そのせいか、ここには、ゆとりがあつて、一泊二日だけだったが、大変居心地が良かった。そして都会を離れ、入学して緊張気味の身体をリラック

スさせて、友達と心の交流を持つことができたのは、この大学セミナー・ハウスのおかげだと思ふ。来年の春、ここへ行くのが、今からとても楽しみだ。

（十文字学園女子短期大学生活専攻・桜井綾子）
●卒業生の方の話は、自分達が勉強することが役立つこと、それには自分が受身であつてはいけないということであつた。また教官との懇談会では、我々が抱えている環境問題は、解決することが難しく、我々が何をすべきかを考えました。その夜友人と、そのことについて様々な意見を出し、みんなで考えました。一泊二日と短かつたですが、学ぶことが多く良いセミナーだったと思います。

（東京農工大学環境資源科学科・堀越千聡）

平成8年4月～5月
新入生オリエンテーション合宿実施状況

学校名・学科名	学生	教師	合計	
●4月(28グループ)				
東京薬科大学(新入生歓迎キャンプ)	*242		242	
中央大学・国際交流センター(留学生)	165	4	169	
恵泉女学園大学・人文学部	244	25	269	
共栄学園短期大学・秘書、児童福祉専攻、住居学科	243	20	263	
中央大学・独文学専攻	98	6	104	
中央大学・心理学コース	86	2	88	
日本医学技術専門学校	49	12	61	
東京都立大学・電気、電子情報工学科	69	11	80	
お茶の水女子大学・文教育学部	266	25	291	
お茶の水女子大学・理、生活科学部	333	24	357	
東京工芸大学・建築学科	135	20	155	
東京職業能力開発短期大学校	65	10	75	
港湾職業能力開発短期大学校	57	6	63	
東京都立大学・工業化学科	59	9	68	
東京コンピュータ専門学校	161	8	169	
東京コンピュータ専門学校	142	8	150	
武蔵工業大学・電子通信工学科	199	21	220	
大妻女子大学・社会情報学部	215	16	231	
東京都立大学・機械工学科	35	9	44	
日本女子大学・社会福祉学科	84	15	99	
東京都立短期大学・経営システム学科Ⅱ部	106	14	120	
東海大学・西洋史学専攻	55	6	61	
東京都立医療技術短期大学	270	55	325	
中央大学・教育学コース	69	7	76	
十文字学園女子短期大学・生活学専攻	258	9	267	
大妻女子大学・児童学科	115	14	129	
東京学芸大学・幼児教育学科	23	6	29	
慶応義塾大学・国際センター(留学生)	88	11	99	
●5月(28グループ)				
東京会計法律学園	*213	14	227	
東京基督教大学・神学部	32	10	42	
前橋市立工業短期大学・建築学科	44	14	58	
東京会計法律学園	*287	8	295	
東京工科大学・情報通信工学科	116	11	127	
津田塾大学・英文学科	228	15	243	
東京学芸大学・障害児教育学科	40	4	44	
東京学芸大学・地学教室	32	4	36	
東京学芸大学・生物学教室	32	4	36	
東京学芸大学・化学教室	35	4	39	
東京学芸大学・物理学教室	33	3	36	
東京学芸大学・理科教育教室	12	2	14	
日本女子大学・教育学科	99	11	110	
東京工科大学・機械制御工学科	216	16	232	
東京都立短期大学・経営情報学科	160	19	179	
文教大学女子短期大学部・英語英文科	*260	16	276	
明治学院大学・第Ⅱ部社会科学科	78	11	89	
東京学芸大学・文化財科学教室	24	1	25	
東京学芸大学・自然環境科学教室	45	11	56	
東京工科大学・電子工学科	154	13	167	
東京工科大学・情報工学科	202	16	218	
東京都立短期大学・文化国際、健康栄養学科	134	20	154	
大妻女子大学短期大学部・実務英語科	163	9	172	
東京農工大学・環境資源科学科	57	11	68	
東京外国語学科・ポルトガル語専攻	37	4	41	
埼玉大学・電気電子システム工学科	60	5	65	
東京都立短期大学・経営情報学科Ⅱ部	72	16	88	
白梅学園短期大学・保育科	193	18	211	
計 56グループ(31校)	実人数	6,989	663	7,652
	延人数	7,984	705	8,689

注. *は2泊

利用状況

'95年12月～'96年5月
*11回月2回利用
日帰りを除く

■12月(67グループ、延二、三七〇人)

- 東京学芸大学助教授 生野 晴美
- 東京農工大学講師 野間 竜雄
- 慶応義塾大学教授 関根 政美
- 中央大学助教授 野澤 紀雅
- 東京理科大学教授 狩野 紀昭
- 日本女子大学講師 小塩 和人
- 国際基督教大学自分らしさへの試み 二村 敏子
- 東京都立大学教授 五井 一雄
- 中央大学教授 柳田 辰雄
- 東洋英和女学院大学木村昌人・慶応義塾大学山田太門・中央大学横山彰合同セミナー
- 東京都立大学教授 栗原 興吉
- 東京都立大学リーダーズキャンパス アイセック早稲田大学委員会 郷司 亮
- 日本大学教授 庄司 興吉
- 成蹊大学国際交流センター 根岸 雅史
- 東京大学助教授 栗原 彬
- 東京外国語大学助教授
- 立教大学教授



〈最終合宿その1〉東京外国語大学原誠教授(前列右から2人目)の合宿を終えて('95.12.18/第6セミナー室)

- 東京経済大学教授 色川 大吉
- 東京外国語大学教授 原 誠
- 早稲田大学教授 平澤 茂一
- 早稲田大学教授 森 元孝
- 東京都立大学教授 柳沢 治
- 明治学院大学教授 神保 信一
- 東京大学教授 坂部 恵
- 早稲田大学教授 片山 寛
- 恵泉女学院短期大学英文学教科総合科目「国際」 洪谷 隆一
- 早稲田大学講師 五味 健吉
- 法政大学教授 鈴木 重勝
- 早稲田大学教授 藤澤 好一
- 芝浦工業大学教授 吉田 俤郎
- 工学院大学助教授 遠藤 和義
- 工学院大学助教授 遠藤 和義
- 東京外国語大学リーダーシップトレーニング 稲積 宏誠
- 青山学院大学助教授 水野 節夫
- 法政大学助教授 松本 幸一
- 日本大学助教授 岩田 伸人
- 高千穂商科大学助教授 岩田 伸人
- 早稲田大学絵画会 坂田 長生
- 東海大学教授 坂田 長生
- 早稲田大学大槻ゼミ 西島 利尚
- 法政大学助教授 豊田 秀樹
- 立教大学助教授 金谷 憲
- 東京学芸大学助教授 村越 洋子
- 早稲田大学雄弁会 吉田 襄
- 大月短期大学教授 長谷川雄一
- 国士館大学教授 上野 敦男
- 駒沢女子大学教授 上野 敦男
- 山梨学院大学教授 今尾 佳生
- 玉川大学講師 常田奈津子
- 日本女子体育短期大学助教授 常田奈津子
- 日本獣医畜産大学教授 松木 洋一
- 函館大学講師 津金 孝行
- 函館大学助教授 藤嶋 暁
- 立命館大学教授 岩田 勝雄
- 立正大学講師 厚東 偉介

- 現象学解釈学研究会 第16回社会学合同セミナー
- 第168回社会学合同セミナー
- 運動機能セミナー
- 都市社会地理研究会
- ベルマンコンテニューム郡内研究会
- 文学教育研究者集団
- 富士電機情報サービス/エス・アール・エル/技術研究組合新情報処理開発機構
- 1月(33グループ、延二、一九〇人)
- 東海大学教授 坂田 長生
- 青山学院女子短期大学講師 高橋雄一郎
- 東京都立大学教授 錦田 忠彦
- 東京理科大学教授 狩野 紀昭
- 東京農業大学講師* 大久保 武
- 東海大学教授 師岡 孝次
- 東京都立大学助教授 鳴澤 實
- 東京都立大学助教授 大塚 和夫
- 東京外国語大学教授 田島 信元
- 横浜国立大学助教授 茂垣 広志
- 東京都立立川短期大学教育問題研究会 椎橋 隆幸
- 中央大学教授 麻生 幸
- 千葉商科大学教授 幸
- 中央大学経済学部ゼミナール連合会 野口 祐
- 創価大学教授 野口 祐
- 埼玉医科大学短期大学助教授 岸 良範
- 東京神学大学第27回教職セミナー 若林 俊輔
- 都留文科大學教授 福田 京平
- 徳島文理大学助教授 福田 京平
- 「かわりの発達と歪み」研究会
- 日本グループワーク・トレーニング協会 確率論セミナー
- 第11回大学教員研修プログラム
- 運動機能セミナー
- 日本自然保護協会
- (個人利用)
- 住宅・都市整備公団 根来 讓二
- 2月(48グループ、延四、三九八人)
- 駒沢大学助教授 谷敷 正光

- 杏林大学教授 千葉 洋
- 中央大学教授 田野崎昭夫
- 中央大学経済学部行事実行委員会 亀山 三郎
- 中央大学教授 高柳 先男
- 明治大学教授 森川八洲男
- 中央大学学友会文化連盟音楽研究会
- 帝京大学「明日の会」 田中 拓男
- 中央大学教授 田中 拓男
- 立教大学助教授 設楽 國廣
- 明治大学教授 明治大学助教授 牧野 誠一
- 日本大学教授 鈴木 功
- 青山学院大学教授 寺東 寛治
- 東京都立大学教授 宮川 彰
- 帝京大学書道部 宮川 彰
- 明治学院大学人形劇団ZOO 滝野 功
- 帝京大学教授 一橋大学教授 滝野 功
- 東京純心女子短期大学卒業研修会 秋谷 治
- 中央大学社会科学研究所 原田 勝弘
- 明治学院大学教授 武蔵 武彦
- 千葉大学教授 菅沼 憲治
- 千葉商科大学教授 金 台侖
- 青山学院大学教授 金 台侖
- 上智大学音楽協議会
- 成蹊大学文化会本部リーダーズ・キャンパス 五味 健吉
- 法政大学教授 寺中 良二
- 駒沢大学教授 山口 和孝
- 埼玉大学学生保険委員会 大津 悦夫
- 明治大学教授 大津 悦夫
- 立正大学教授 大津 悦夫
- 聖学院大学・女子聖学院短期大学キリスト教八王子合宿 聖学院ハンドベル・クワイア
- 郡内研究会
- 東京都専門学校陸上競技連盟
- アカー
- 基督教児童福祉会
- PBE M会
- 日本山岳協会
- 国際交流サービス協会/アムウェイ山崎

(21)



〈最終合宿その2〉国際基督教大学三宅彰教授
(前列中央)。'74年以来23年目の合宿を終えて
('96.3.11 / 交友館前庭)

グループセミナー / J.A.東京共済連 / 日
野自動車工業 / 日本ビー・オー・ピー・広
告協会 / 日立製作所
〈個人利用〉

深川第五中学校教諭

南出 新治

■3月(83グループ、延六、三三三人)

アイセック早稲田大学委員会

水野 節夫

法政大学教授

遠藤 喜佳

中央大学講師

下斗米 伸夫

成蹊大学国際交流センター

見田 宗介

日本大学ポテト

筑波大学数学教育研究室

法政大学教授

東京大学教授

慶応義塾大学英語会

横浜国立大学体育系サークル指導者セミ
ナー

明治学院大学大学院卒業論文ゼミ

駒沢大学助教授

駒沢大学助教授

国際基督教大学教授

明治大学教授

専修大学教授

東京理科大学教授

谷敷 正光
瀬戸岡 紘
三宅 彰
金子 逸郎
望月 清司
狩野 紀昭

東京学芸大学講師 投野由紀夫

中央大学アナウンス研究会

東京外国語大学教授 中嶋 嶺雄

早稲田大学理工学部英語会

東京経済大学文化会リダースキャン

東京大学比較文学比較文化研究室

東京都立大学助教授 江原由美子

明治学院大学サークル連合会文化団体委
員会

早稲田大学助教授 大槻 義彦

千葉大学助教授 工藤 秀明

日本大学スポーツ応援リーダー部

千葉商科大学助教授 遠藤 喜佳

法政大学教授 大谷 禎之介

大妻女子大学教授 大野 清志

東洋英和女学院大学教授 高松 基之

東京薬科大学生活協同組合

早稲田大学絵画会

アイセック一橋大学委員会

早稲田大学助教授 松嶋 敏泰

東京外国語大学劇団ダダン・A・染井

千葉大学助教授 野沢 敏治

千葉大学助教授 安孫子 誠男

多摩大学助教授 佐藤 宗子

多摩大学助教授 北矢 行男

吉備国際大学助教授 小山田 紀子

創価大学イタリヤ研究会

東京会計法律学園職員研修*

東京大学教育学部附属高等学校

多摩大学講師 松田 義幸

青山学院女子短期大学ハンドベルクワイア

国学院大学教授 平林 勝政

独協大学教授 大竹 孝司

創価大学東南アジア研究会

国士館大学講師 木村 誠

創価大学留学生会

独協大学教授 宮川 淑

創価大学教授 西村 洋子

マレーシア政府派遣留学生(日本インド
ネシア科学技術フォーラム)

郡内研究会

障害児教育研究会

第169回大学共同セミナー

言語研究会

現象学的社会学研究会

フランス語応用普及協会*

政策・情報系学部交流会

認識論研究会

東京大学加藤ゼミOB会「さぶろう会」

女性のサポートグループ

朝日カルチャーセンター・横浜

国際教育交流協会*

日本人間工学会

日英地理学会議

山王教育研究所

文学教育研究者集団

エイ・エフ・エス日本協会

慧星会議実行委員会

安全問題研究会

生活協同組合コープとうきょう

〈個人利用〉

愛知女子短期大学教授

外務省

V研究会

東京都立科学技術大学客員教授

■4月(84グループ、延六、二二一人)

青山学院大学教授

明星大学教授

中央大学教授

東京薬科大学新歓祭

法政大学教授

明治大学教授

東京学芸大学教授

中央大学国際交流センターオリエンテー
ション・キャン

駒沢大学教授

埼玉大学教授

成蹊大学教授

中央大学独文学専攻新入生オリエンテー
ション

中央大学心理学コース新入生オリエンテ
ション

中央大学心理学コース新入生オリエンテ
ション

中央大学教授

東京都立大学史学科新2年生オリエンテ
ション

東京大学教授 家田 仁

日本大学教授 小林 晃

東京都立大学電気・電子情報工学科新入
生ガイダンス

中央大学教授 池上 一志

明治大学教授 野田 稔

お茶の水女子大学文教育学部新入生セ
ミナー

お茶の水女子大学理・生活科学部新入生
セミナー

帝京大学「明日の会」

東京工芸大学建築学科新入生オリエンテ
ション

杏林大学教授 熊谷 文枝

慶応義塾大学教授 笠井 昭次

東京大学講師 和田 幹彦

東京都立大学工業化学科新入生オリエン
テーション

明治大学・川口短期大学森久ゼミ

横浜国立大学助教授 鳥居 伸好

武蔵工業大学電子通信工学科フレッシュ
マン・キャン

大妻女子大学社会情報学部新入生オリエ
ンテーション

東京都立大学機械工学科新入生ガイダンス

東京都立短期大学経営システム学科新入
生オリエンテーション

日本女子大学社会福祉学科新入生オリエ
ンテーション

東京都立大学助教授 湯浅 欽史

東京都立大学社会福祉学科新2年生合宿

東海大学西洋史学専攻新入生研修会

東京都立医療技術短期大学新入生オリエ
ンテーション・キャン

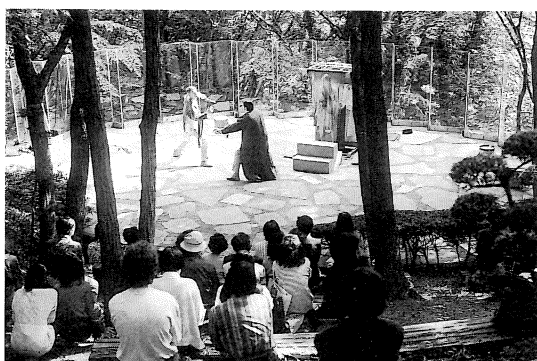
中央大学教育学コース新入生オリエンテ
ション

工学院大学講師 宮坂 勝利

東京都立大学助教 城丸 春夫
 東京学芸大学幼児教育学科新入生オリエンテーション
 大妻女子大学児童学科新入生オリエンテーション
 立教大学教授 中江 幸雄
 慶応義塾大学国際センター新入留学生オリエンテーションキャンパス
 慶応義塾大学三田祭実行委員会
 駒沢大学教授 大久保治男
 東京工芸大学教授 大場 正昭
 専修大学教授 麻島 昭一
 中央大学教授 中川洋一郎
 東京農工大学教授 秋山 三郎
 学習院大学教授 坂本孝治郎
 武蔵工業大学教授 西脇 威夫
 東京学芸大学教授 上野 一彦
 マレーシア政府派遣留学生(日本インドネシア科学技術フォーラム)
 恵泉女学園大学人文学部新入生フェロシ
 共栄学園短期大学秘書・児童福祉学専攻
 新入生オリエンテーション
 日本医学技術専門学校新入生オリエンテーション
 都留文科大学教授 川上 則道
 八千代国際大学助教 山口 桂子
 東京職業能力開発短期大学校新入生オリエンテーション
 港湾職業能力開発短期大学校新入生オリエンテーション
 東京コンピュータ専門学校新入生オリエンテーション*
 YMC A健康福祉専門学校就職就労YMC A健康福祉専門学校社会体育科就職
 職合宿
 十文字学園女子短期大学生活学専攻新入
 生交歓会
 神奈川大学助教 堀野 定雄
 帝京科学大学助教 小川 家資
 現代と経済

数理生物学セミナー
 ルディコ研究会
 フェノロジー研究会
 大阪からだところの出会いの会
 言友会
 いのちの電話
 東海変圧器/ベルモント化粧品/ドラコ
 N/都政研究会/ハーブ化粧品/東計電
 算
 (個人利用)
 V研究会 吉本 昌司
 ■5月(83グループ、延五、八二四人)
 明星大学教授 上田 俊昭
 中央大学松柏会
 中央大学現代社会科学研究会
 芝浦工業大学電子計算機研究会
 学習院大学シエイクスピア・ドラマ・ソ
 サエティ
 法政大学助教 江村 裕文
 中央大学教授 河西 良治
 中央大学教授 田中 拓男
 中央大学白門会 北野 弘久
 日本大学教授 津田 謙
 東京学芸大学障害児教育学科特別専攻科
 研修
 東京工科大学情報通信工学科フレッシュ
 マンセミナー
 津田塾大学英文学科フレッシュユマニ
 ャ
 東京学芸大学障害児教育学科新入生オリ
 エンテーション 陣内 靖彦
 東京学芸大学教授
 東京学芸大学新入生合宿研修
 化学教室
 生物学教室
 地学教室
 物理学教室
 理科教育教室
 文化財科学教室
 自然環境科学教室
 日本女子大学教育学科新入生オリエンテ

ーション
 駒沢大学教授 竹内 啓一
 中央大学教授 金子 貞吉
 中央大学第I経済学部ゼミナール連合会
 東洋英和女学院大学教授 朝倉 孝吉
 法政大学教授 陣内 秀信
 東京工科大学機械制御工学科フレッシュ
 マンセミナー
 東京都立短期大学経営情報学科I部新入
 生オリエンテーション 横山 成昭
 芝浦工業大学助教 横山 成昭
 文教大学女子短期大学部英語英文科フレ
 ッシユメンセミナー
 武蔵工業大学就職課程
 明治学院大学第II部社会科学科フレッシュ
 マンキャンパス 奥村 哲
 東京都立大学教授 涌井 秀行
 立教大学講師 横山 正明
 東京工科大学電子工学科フレッシュユマ
 ンセミナー
 東京工業大学教授 横山 正明
 東京工科大学情報工学科フレッシュユマ
 ンセミナー
 東京都立短期大学文化国際学科・健康栄
 養学科新入生オリエンテーション
 大妻女子大学短期大学部実務英語科新入
 生オリエンテーション
 東京農工大学環境資源科学科新入生オリ
 エンテーション
 東京外国語大学ポルトガル語専攻新入生
 オリエンテーション
 埼玉大学電気電子システム工学科新入生
 オリエンテーション
 東京都立短期大学経営情報学科II部新入
 生オリエンテーション
 中央大学くるみクラブ
 中央大学カールトン大学短期留学合宿
 中央大学教授 高窪 利一
 中央大学国際交流センター
 立教大学囲碁部 沖塩 莊一郎
 東京理科大学教授



劇を通して「生きた英語」への親近感を持たせようと努めるイギリス人の劇団「ホワイトハウスシアター」が5月中に22泊。その間ハウスでも「ロミオとジュリエット」を上演した(’96.5.12/野外ステージ)

淑徳大学助教 野田 陽子
 東京大学教授 森地 茂
 白梅学園短期大学保育科新入生オリエン
 テーション
 東京都立大学教授 日野 秀逸
 早稲田大学教授 那須 壽
 東京会計法律学園就職セミナー*
 東京基督教大学神学部新入生オリエンテ
 ーション
 前橋市立工業短期大学建築学科新入生オ
 リエンテーション 星野 隆三
 東京造形大学教授 近藤 秀実
 多摩美術大学教授
 生化学若手の会
 淀橋教会
 在日大韓基督教青年会関東地方連合会
 クリエイティブ・アート実行委員会*
 カトリック豊島教会新求道共同体
 数学工房
 アカー*
 高橋聖書集会
 カンバランド長老キリスト教会東京中会
 ホワイトハウスシアター・ジャパン

開催予告

●第170回大学共同セミナー●

ハリウッド帝国の世界像 —イメージ・ポリテクス—

1996年10月26~27日(土~日の1泊2日)

ハリウッド映画は、つまるところ、アメリカ社会やアメリカ人がどのように世界を、他の民族を見てきたか、イメージしてきたかをわれわれに教えてくれる願ってもない素材でもあるのだ。さあ、みなさん、ハリウッド映画を観ながらの珍妙にして有意義な世界史の講義を通して、新しい映像観をつくってみませんか。

■主題解説

東京経済大学コミュニケーション学部教授 桜井哲夫氏

■シンポジウム

1. なぜ西部劇はメキシコ人を罰するのか

——文化関係の構図とその原理——

茨城大学人文学部教授 落合一泰氏

2. ハリウッド映画に見るアジア人の肖像

ノンフィクション作家 村上由見子氏

3. 太平洋・ハワイ

——楽園幻想とハリウッド南洋映画——

東京経済大学コミュニケーション学部教授 山中速人氏

4. デイズニールランド都市の政治学

——環境化するハリウッド帝国——

東京大学社会情報研究所助教授 吉見俊哉氏

5. ハリウッド映画とヨーロッパ

——アメリカの〈内なるヨーロッパ〉——

東京経済大学コミュニケーション学部教授 桜井哲夫氏

定員：70名/申込締切：10月14日/対象：大学生および社会人/会費：8,500円(社会人10,000円)

●問い合わせ先

大学セミナー・ハウス企画室

TEL 0426-76-8532 FAX 0426-76-0266

●第23回国際学生セミナー●

転換期の世界

—アジアにおける日米関係—

1996年11月22~24日(金~日の2泊3日)

世界は今、急速に変化している。この数年間に起こったことは、40、50年前にはまったく予想できなかった。冷戦が終焉した後、パックス・アメリカナの世界も新たな世界秩序を求めて変化しつつある。過去の大きな歴史的な流れを踏まえて、将来の世界を展望してみることは意義のあることだ。日米関係は今後の世界の動向を左右するほど重要な2国間関係である。同時にアジア太平洋地域は経済的にもっともダイナミックな発展を遂げている地域である。今回は特にこの日米関係を中心に、次のような視点から討論したい。

■分科会のテーマと講師

A. 歴史から読み解く日米関係の21世紀像

中央大学法学部教授 滝田賢治氏

神田外国語大学外国語学部助教授 高杉忠明氏

B. 「イメージから見た」アジアにおける日米関係

桜美林大学国際学部教授 上坂 昇氏

時事通信社解説委員 金重 紘氏

C. 台湾海峡クライシスと日米関係

日本大学国際関係学部教授 宇佐美滋氏

筑波大学社会科学系助教授 井尻秀憲氏

D. アメリカの政権交代の視点から見た日米関係

聖心女子大学文学部教授 関場誓子氏

南山大学法学部教授 菊池 努氏

E. U.S.-Japan Relations in the Context of Regionalism

(英語で討論する)

筑波大学社会工学系教授 佐藤英夫氏

国際大学日米関係研究所研究員 信田智人氏

定員：100名(内留学生30名)/申込締切：11月8日/対象：大学生および社会人/会費：12,000円(社会人15,000円)

●館長室から●

うだるようなという形容がピタリの毎日、冷房のきかない館長室に同情して職員が備えてくれた二台の扇風機を回転させながら、この合併号の仕上げをしています。

三十年という年月は、いろいろな意味でセミナー・ハウスの活動に切れ目をもたらしていますが、記事でご覧頂けますように、評議員・役員人事もこれまでにないほど多くの方々の交替。中に、草創期以来、表に裏に、口に出せない程の協力をいただいた恩人の逝去によるご退任もあって、長い間のご恩を改めて心に重くうけとめています。交友館の生みの親、中島正樹氏、この編集の最中には大塚久雄先生、そしてゲラを手に入れているときに初代理事長石館守三先生。

千人会の会員も層の厚さは高齢への片寄り。大先輩の方々が「元気で生きていることへの感謝として」とお送り下さる会費には、心の底から「有難うございます」と合掌の思いで頂いています。

アツというまに館長七年目の私も、お支え下さる方々のお心に励まされ、「生きていくうちに活きて仕事を」のつもりですが、これからの新しいセミナー・ハウスの活動の展開のため、恩人への感謝と共に若い方々のご協力を望むや切。どうぞよろしく。(岡)

表紙の写真は閉校式に正装で出席するマレーシア政府派遣留学生たち(18頁参照)

環境プロデューズ/ドラコン/清水建設
/エヌ・ティ・ティ・ファシリティーズ
/東芝デザインセンター
(個人利用)
V研究会* 吉本 昌司
深川第五中学校教諭 南出 新治

セミナー・ハウス

1996年8月25日発行(年4回)
第142・143号

発行人=財団法人 大学セミナー・ハウス

〒192-03 東京都八王子市下柚木1987
TEL 0426-76-8511 FAX 0426-76-1220
振替口座 00150-1-74590

発行人=岡 宏子
編集=大学セミナー・ハウス企画室
制作=中央公論事業出版

SEMINAR HOUSE

The Quarterly Journal of Inter-University Seminar House
1996, No.142・143